

本年4月1日に、イスラエルによるとみられるシリアのイラン大使館爆撃以来、イランがかなり脚光を浴びています。本資料は、イランと米国との長い確執を記したもので、今日の状況の背景を知るご参考になればと思います。概要は、p3~p7, p13~p16, p40~p64を、ご一読いただければよろしいのではないかと思います。

現状のイランは、①最高指導者ハメネイ師の周辺の支配者層、②イスラームの教えを厳しく守るべきと頑なに考える人々、③緩やかに教えを守りながら平和に生きたいと願う多くの一般層などに、分けて考えることができると思います。添付した資料は、どちらかというと米国に批判的で、③のイランの一般層寄りの見方になっていますが、それには歴史的な理由があります。

戦後生まれの日本人にとっては、民主主義は当たり前のように思えますが、世界の多くの地域では、民主主義国家になるのは奇跡に近いほど難しく、稀なことです。特に中東のイスラーム諸国では、唯一、トルコだけが何とか民主主義国家といえる状況です。

今ではあまり知られていませんが、イランにも、穏やかな民主主義国家になる可能性が、1953年頃には存在していたのに、その稀な機会を無にしたのが、当時、国連の常任理事国として、民主主義と平和の守護者を名乗っていた米国と英国でした。仮に、1953年に米国CIAが謀略でクーデターを起こして、正当な選挙で選ばれたイランのモサデク首相を退陣に追い込まなければ、その後パフレヴィー王朝がイランを支配して人々を激しい圧政下に虐げることは無かったでしょうし、そうすれば、その圧政を倒すために宗教の熱狂が必要とされることも無く、したがって、1978年のホメイニーによるイラン宗教革命も無く、現在のように極端なイスラーム主義者がイランを支配することも無かったのではないかと考えるからです。（このことは、p46の(4)私見の辺りに記しています。）

尚、今日、ウクライナの人々は、ロシアに供与されたイランのドローン攻撃に苦しんでいます。これは、直接的にはプーチンが元凶ですが、間接的には米国の前大統領トランプの「イラン核合意破棄」の結果です。

イラン核合意は、米国のオバマが大統領時代に苦労して合意にこぎつけたもので、その結果、イランは核兵器開発を止め、西側諸国との原油等の取引再開により、イラン経済が回復しイラン国民の生活が安定し始めていたのです。トランプが、極端なイスラエル寄りの政策をとって、核合意を破棄して実施した経済制裁に西側諸国まで同調させたため、イラン一般層の経済状態は、破壊されました。

イラン国民は、米国政府に深い憎しみを持っていますが、米国の文化には憧れています。イラン国民は、19世紀からロシア政府が英国と組んで、イランの政治経済を蹂躪したことから、ロシア政府を嫌い、ロシア文化にはそれほど興味を持っていないようです。

トランプが核合意を破棄さえしなければ、イランはドローン兵器をロシアには供給しなかったでしょうし、ウクライナの人々がイランのドローン兵器に死傷させられることもなかったでしょう。

# 目 次

0. はじめにー1	イランの複雑な状況	p 3
0. はじめにー2	イランとの核合意からの離脱	p 6
0. はじめにー3	米国は政治が宗教に支配される異様な国	p 8
1.	イランとはどんな国か	p 13
2.	古代におけるイランの歴史	p 17
3.	イスラーム登場後のイランの歴史	p 25
4.	パフレヴィー王朝下のイランの歴史	p 41
5.	イスラーム革命後のイランの歴史	p 49
6.	破綻国家を増やさないために	p 65
7.	民主主義国家が誕生するのは、奇跡に近いほど稀なこと	p 71
8.	参考文献	p 79

\*\*\*\*\*

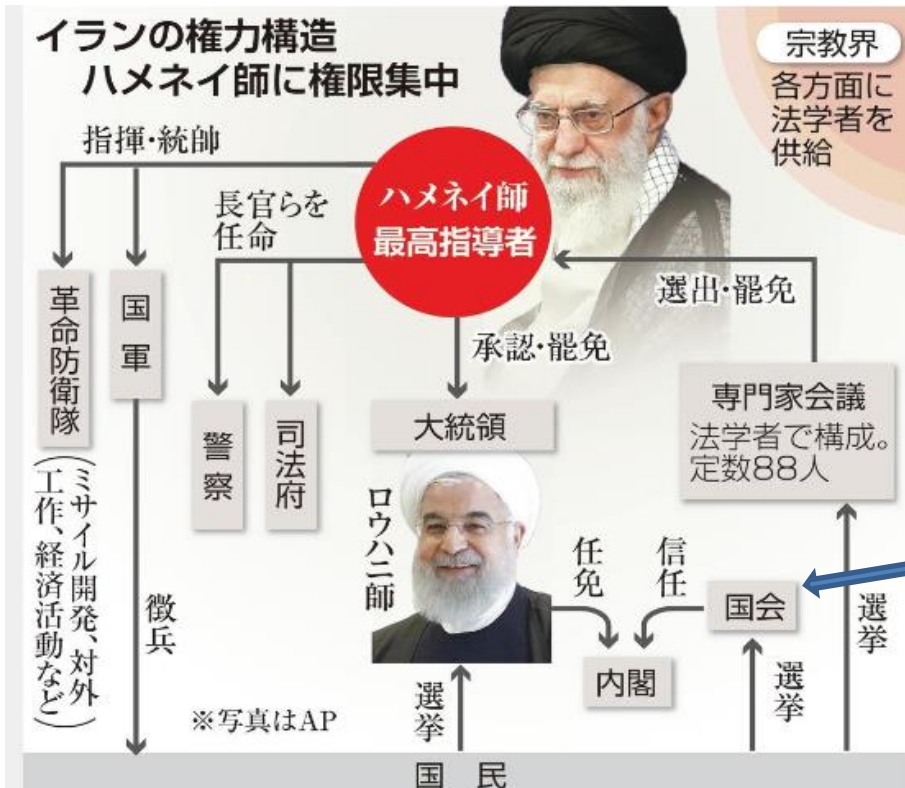
参考説明1	イラン高原のカナート	p 20
参考説明2	シーア派について	p 36
参考説明3	イラン・コントラ事件	p 72
参考説明4	米国の対外拡張主義について	p 74
参考説明5	日本は、難民受け入れ数が極端に少ない	p 77

(注) シリアの範囲：

第一次世界大戦終了後に、英仏が武力によって強引に分割統治を始めた時の地域命名まで、シリアという地名は、今のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、パレスチナの全てを含むものであった。この資料では、シリアは、原則として、この伝統的な範囲を示す。

# 0. はじめにー1 イランの複雑な状況（その1）

- (1) 1979年、イラン王政は、その圧政に耐えかねた国民の反乱によって倒された。その後、国王を倒した諸勢力間の激しい主導権争いの結果、組織力・団結力で優れたイスラーム法治国家主義を掲げる一派が、**国民の選挙で大勝し**、現在の体制が成立した。



(2019年時点：産経新聞の資料に追加)

最高指導者が革命防衛隊及び国軍の指揮権を持っている。

前任者・ホメイニー師が指名し、終身在位。

(最高位の法学者たちは、政治から距離を置き、ハメネイは法学者のレベルでは2段は格下とされる)

最高指導者や革命防衛隊の幹部は、膨大な企業集団などによる既得権益を握っており、汚職・腐敗の源泉とされる。

大統領の権限は少ない。候補者の限定された2021年選挙の結果、現在の大統領はライシ師。

(専門家会議は一度も機能していない)

護憲評議会

(・国会議員候補者の適否判断  
・法律を違憲判断)



現大統領ライシ師 反欧米派。有力対立候補が不適格とされ立候補できず、選挙に多くの国民が幻滅。低投票率で選ばれた。

## 0. はじめにー1 イランの複雑な状況（その2）

(2) 【イスラーム法による政治】は、時に民主主義が抑圧され、また女性の権利も制限されている。イスラーム主義者は男女の教育に熱心だが、その結果、高等教育を受けた大勢の若者が、就職できず、現状の政治に反発している。

女性の教育は、**イスラーム主義者から重視され、女性の大学進学率は高い。数学のフィールズ賞の世界唯一の女性受賞者は、革命後のイランで教育を受けた人であり、前副大統領は女性**（両者とも、日本では例がない）。

(3) 現体制を支持する人々も多い。

(4) イラン国民には、米国外交への憎悪と、米国の生活様式や宣伝される自由と明るさへの憧れが混在する（ 아이폰とコーラが大好き 等）。

(5) また、汚職が蔓延しており、このことに、国民の多くが不満を持つ。

（ある国際NGOの調査の、政治家、公務員の汚職の少ない国ランキング

1位：デンマーク、フィンランド、ニュージーランド 18位：日本  
27位：米国 32位：韓国 66位：中国 96位：トルコ

**136位：ロシア 150位：イラン 154位：レバノン** )

## 0. はじめにー1 イランの複雑な状況（その3）

(6) イラン国民の多くは穏やかに、平和に暮らしたいと切望。家族を大切にし、客を歓迎し、もてなす。信義に篤い。総じて、親日的。

イラン国民は、かつて中東のほぼ全域を支配したアケメネス朝ペルシャを祖先にもっていることなど、長い文明の歴史を有していることに、強い誇りを持っている。（米国、サウジアラビアなどに比べ、遥かに長い歴史）

(7) 革命後、米国に逃れたイラン人は数十万人と言われているが、彼らは王政下で優遇された人々が多く「1979年の革命前のイランは、自由で、女性の権利も保障され理想的な国だった」と、米国内で活発に発信するため、米国人の多くも、そのように誤解していると、危惧される。

（2003年、米軍他によってイラクは侵攻を受け、フセイン政権は打倒されたが、それは、フセインに敵対する亡命者が、「イラクには大量破壊兵器がある」と、虚偽の情報を流し、それを米国CIAが信じたからだった。亡命者の情報の見極めは難しい。）

\*\*\*\*\*

トランプの始めた経済封鎖により、イラン国民は困窮に陥っているが、殆ど対抗手段がなく、トランプが選挙で退陣することを願うしか、手立てがないと言われていた。トランプは選挙に負け退陣したものの、今なお経済封鎖は続く。本資料は、イランと米国の確執の経緯について記すが、圧倒的に弱い立場のイラン側に、あえて同情しつつ、私見をまとめたものです。

## 0. はじめにー2 イランとの核合意からの離脱（その1）

- (1) 米国のトランプは、2018年5月8日、イランとの核合意から一方的に離脱すると宣言。同時に、世界各国に、イランとの原油取引等を行えば、その国に経済制裁を科すと脅迫した。

**結局、日本を始め殆どの国が脅迫に屈し、その結果、イラン経済を低迷させ、イラン国民を日々困窮に追いやるという非道な行為（超大国の経済力を用いたテロといえる）の一端を担わされている。**

- (2) 2019年9月14日、サウジアラビアの石油施設がドローンによる攻撃を受け、同国の産油量980万バレルの半数以上が影響を受けた。攻撃を行った組織名は、今もなお不明。

サウジアラビアとしては、大金を払って米国から最新兵器を買い、防護を強化していた筈なのに、10基程度の安価なドローン攻撃に弱いことが露呈したこと、また**米国がイランへの武力による報復措置を講じなかったことは、衝撃であった。** イランとの関係改善を模索し始めたとの推測あり。

**米国はシェールオイル開発により世界一の原油産出国になり、米国にとってサウジの重要性は低下、サウジもそれを認識している。**



## 0. はじめにー2 イランとの核合意からの離脱（その2）

- (3) 慶応大学 田中浩一郎教授は、サウジ石油施設攻撃の直後のテレビ番組の解説において、今回のイラン関連の危機に関して、**「イラン核合意から離脱したトランプが放火犯である」**と指摘。
- (4) 2020年1月3日、イラン革命防衛隊・コッズ部隊のスレイマニ司令官が殺害されたのは、イラクの米国大使館襲撃に激怒したトランプが、短絡的に指示したため、との報道があるが、イランと米国の緊張関係を極限に高めた。

**その結果、1月8日イラン軍がウクライナの旅客機を米軍機と見誤り、撃墜して、176名全員が死亡するという悲劇が生じた。**

この事故について、1月10日のTV放送で、米国のパトリック・ハーラン氏は、**「1988年、ホルムズ海峡に停泊していた米国の巡洋艦が、イランとの極端な緊張状況下において、情報が混乱し、イランの旅客機を、接近してくるイラン軍機と見誤り、攻撃しなければ自分たちが殺されるという恐怖感にかられて撃墜してしまい、子供66名を含む290名全員が死亡するという悲劇を発生させた。**

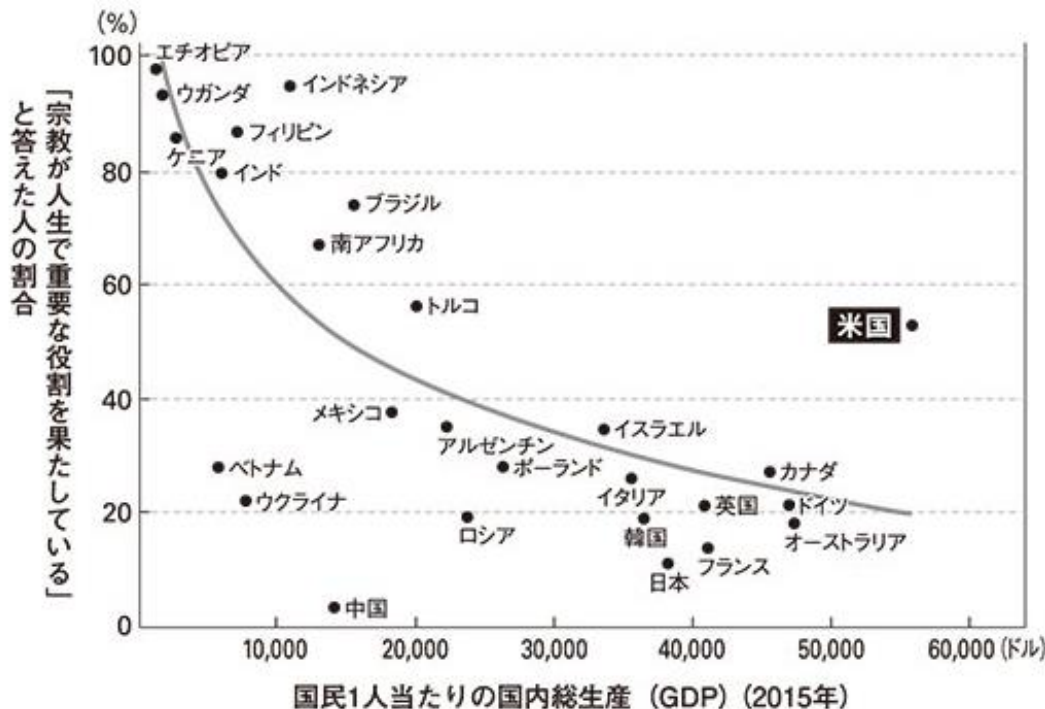
この先例からも明らかのように、極端な緊張関係は回避しなければならないのに、トランプが今の極端な緊張関係を発生させた。」と指摘。

# 0. はじめに一3 米国は政治が宗教に支配される異様な国（その1）

(1) 昔は、神と人間の距離は近かった。人間にとって不可解なことは、神の御業と考えられたからだ。

現代では、不可解な事柄を、科学で解明しようという時代になった。世界のいわゆる先進国の殆どは、政治を宗教の呪縛から解放している。

だが、米国は違う。米国は、科学技術によって世界を制覇しているのに、**国民の25%以上（一説には40%）が、進化論を否定し、聖書に書かれていることだけが正しいと信じ、それによって内政・外交が支配されている異様な国である。**



(左の図は、京都女子大学  
法学部客員教授 三井誠氏の  
資料から )

先進国の中で、米国が  
突出して宗教を重要視  
していることがわかる。



# 0. はじめに一3 米国は政治が宗教に支配される異様な国 (その2)

## (2) 福音派(Evangelicals)とは何か？

### 1) キリスト教徒にとって重要な日は次の三つ

- ・ イエスの誕生日 (クリスマス)
- ・ イエスが、処刑後3日目に復活した日
- ・ **復活から50日後、聖霊が降臨した日**

復活後、イエスは人々に教えを告げていたが40日後に、「これから10日後、聖霊が現れる」と告げて天に戻った。

10日後、聖霊が降臨して信徒たちを満たし、(右の図)、信徒たちはこれまで話したこともない地中海各地の言葉で話し始め、しかも互いに意味を理解し合えたという(異言)。

復活後50日後のこの出来事を、ペンテコステ(ギリシャ語の50日後にちなむ)という。

- ### 2) プロテスタントの福音派とは、特定の教会系列に属する人を意味するのではなく、聖書の記述が全面的に正しく、聖霊降臨が現代にも起きていると信じている人たち、とみなすことができる。



## 0. はじめに一3 米国は政治が宗教に支配される異様な国（その3）

### （3）米国の福音派は、いつ頃から勢力を増したのか？

- 1) 生物の進化が、聖書に記されていることと全く異なる可能性を、キリスト教社会が知らされたのは、ごく最近のことである（1859年、ダーウィンの進化論）。
- 2) 進化論登場後、戸惑いの中にも、キリスト教徒の多くは次第に進化論を受け入れていった。それは、米国でも同じだった。
- 3) だが1960年頃から、米国のキリスト教社会で、「聖霊に満たされた」或いは、「“異言”を経験した」と主張する人々を信じる信者（彼らは科学よりも、聖書の記述を正しいと信じる）の割合が急激に増加した。これは、過去50年間の間に起きた出来事である。（ビリー・グラハム他の活動）

『**多くの人々、特に日本人が全く気付かないうちに、世界の教会の中身が全く変わってしまった。**（参考文献17のp84）』

なぜ米国が突出して福音派の影響を受けたのか？ それは米国には精神的な拠り所とすべき長い歴史も、伝統もないために、ストレスに曝されたとき、宗教に頼ったため、という説明が多い。

1980年代から、米国の中東外交政策に、福音派が大きな影響を与えてきた。

## 0. はじめに一3 米国は政治が宗教に支配される異様な国 (その4)

### (4) 福音派は、なぜイスラエルを強く支援するのか？

次の二説がある。いずれの説も、ユダヤ教徒そのものに親密感があるのでもなく、信頼を置いているのでもないことに注意。

理由1：福音派にとって、イエス・キリストの再臨こそが待たれることである。そのためには、イエスが前回出現した時と同じ状況、つまり、エルサレム周辺はユダヤ人のものでなければならない。

(万一、キリストが再臨すると、その後、ユダヤ教徒はどうなるか？  
⇒ キリスト教に改宗するか、地獄に落ちるかのどちらかの運命。)

理由2：福音派にとって、聖書の記述は絶対であり、科学の説明することより正しい。“旧約聖書には、「神は、カナンの全地をユダヤ人に与えた」という記述があるから、ユダヤ人がカナンの地、つまり今のイスラエルの周辺全てを領有すべきである。”

**福音派は25～40%だが、大統領選挙の米国全体の投票率は50～60%だから、熱心に投票する彼らは強い影響力をもつ。**

米国のキリスト教福音派は、彼らの望む政策を米国が進めることによって、中東で多くの人々が苦難を強いられても、意に介さないように見えるが・・・。

## 0. はじめに一3 米国は政治が宗教に支配される異様な国 (その5)

- (5) トランプは、米国内の支持を得るためだけに、福音派の希望する中東政策を決めており、イスラエルと敵対するイランを敵視する政策に固執している。彼の政策の中に、『中東の人々の平和な暮らし』という概念は、全く存在しないと考えたほうがよさそう。
- (6) イスラエルの建国前のユダヤ人によるパレスティナ周辺の土地購入契約の殆どは、不在地主との間でなされ、そこに暮らしていた人々の居住権は無視された。多くの人々が土地を追われたうえで、イスラエルが建国されたことを申し訳ないと思っているイスラエルのユダヤ人も、いる。この人たちは、領土拡張政策に批判的である。
- だが、今のイスラエルの若者は、イスラエル建国を、必然的な正義の出来事として教育されており、「領土拡張も当然」という意見が多い。
- (7) 一方、米国内のユダヤ人の多くはリベラルで民主党支持者が多く、トランプの極端なイスラエル右派勢力支援に反対している。また、イスラエルの拡張主義そのものにも反対する者が増えている。

\*\*\* イルハン・オマール女史は、破綻国家とされるソマリアで生まれたが、12歳で米国へ移住した後、34歳で米国の連邦下院議員に選出された。この例からわかるように、米国は、素晴らしい一面も有しているのだが。

# 1. イランはどんな国か : その1

名称: イラン・イスラーム共和国

面積: 165万平方キロメートル(日本の約4.3倍)

国土の90%が標高1000m以上の高地、

人口: 約8000万人。中東の大国。教育レベル、技術力ともに高い。

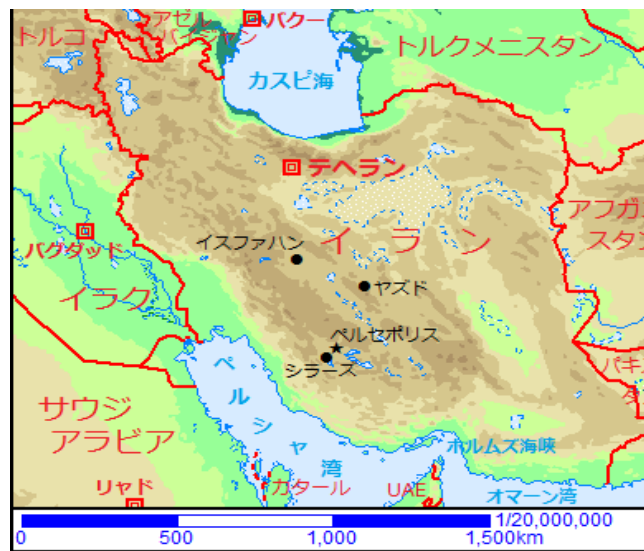
石油埋蔵量 : 世界4位(産出量は9位)

天然ガス埋蔵量: 世界2位(産出量は3位だが、殆ど国内で消費)

一人当たりGDPは16784 US\$(日本の約40%)で、世界54位

女性の社会進出は制約があるが、実際には活発で、前副大統領は女性

多くはインド・ヨーロッパ語族 ⇔ アラビア半島の住民の先祖はセム語族



# 1. イランはどんな国か：その2 「イラン」と「ペルシャ」

イランの人々は、以前から自分たちを「イラン」（あるいは、イーラン：アーリア人に基づく呼称と考えられる）と呼んでいた。

ペルシャという呼び方は、古代ギリシャの歴史家が、イランのある地方を Persan と呼んだことから、ヨーロッパにおいてペルシャという呼び方が広まり、日本にもそのまま伝わってきたもの。

1934年、イラン政府は「イラン」と呼ぶように各国に要請し、これに対応して、日本でもイラン という呼び名を正式に用いることになっている。

但し、今でも歴史的な名称（アケメネス朝ペルシャなど）や文化（ペルシャ絨毯）などについては、ペルシャという名前を用いることが多い。



# 1. イランはどんな国か : その3

イランのダマスクローズは、薔薇の中でも特に香りが高く、香水、ローションなどに広く用いられている特産品。5月の薔薇祭りには、観光客が多く訪れる。





# 1. イランはどんな国か : その4



イランのカスピ海地方から、  
5月の薔薇祭りに観光に来た  
3人の女性弁護士仲間  
(スカーフを華やかに装っている)



小学校の校外授業風景（イラン語の授業）  
小学校、中学、高校は男女別学、**大学は共学**

イランの大学・短大進学率：2014年 男：68%、女64%

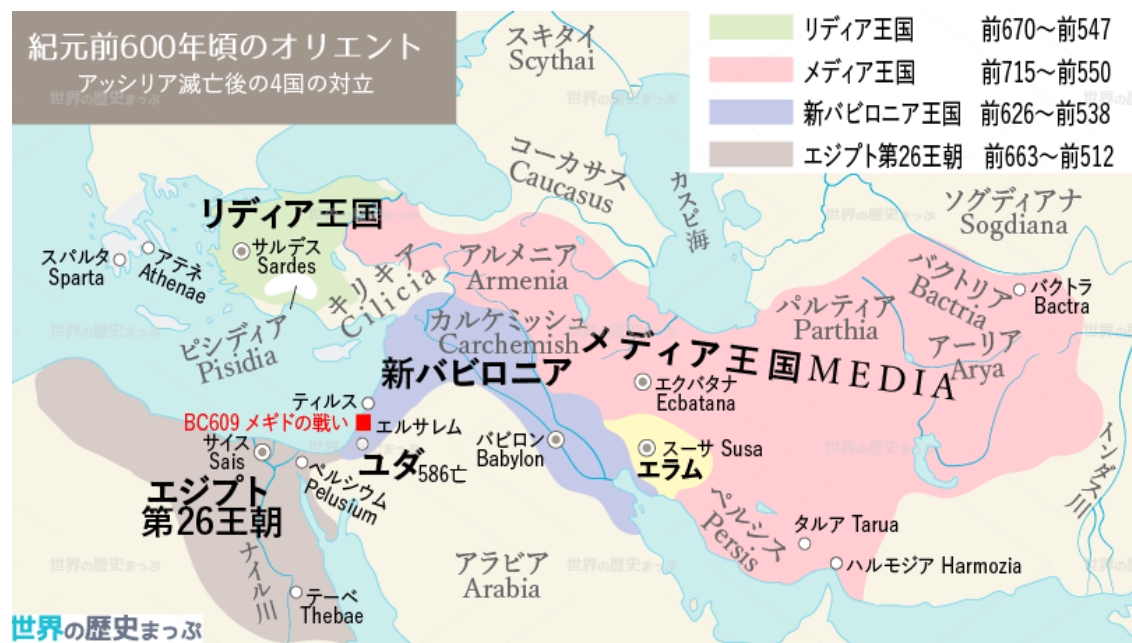
日本は、2014年に、男女ともほぼ57%なので、イランの方が高い。

以前から女性の自動車運転は認められており、女性タクシー運転手も活動。

米国の核合意からの離脱後、物価は数倍に上昇しており、イラン国民の暮らしをひっ迫させている。

## 2. 古代におけるイランの歴史：その1

- (0) BC3200年頃からエラムと呼ばれる帝国がイランのペルシャ湾沿いに勃興し、スサを首都として、BC600年までの長期間続き、メソポタミアの各王朝と、互いに介入を繰り返した。エラム人の残した文化および政治制度は、その後のイランの王朝に影響を及ぼしたが、エラム人がどこから来た種族なのか、エラム語の系統とも、不明。原エラム語は未解読。
- (1) 中央アジア方面にいたアーリア人(インド・ヨーロッパ語族)が、紀元前1000年くらいから、イラン高原一帯に定着したといわれ、それが今のイラン人の祖先と考えられている。アーリア人の最初の国、メディア王国は広範な領域を有した。
- 下図に示すように、当時の中近東は、メディア、新バビロニア、古代エジプトが3大強国だった。



## 2. 古代におけるイランの歴史 : その2 アケメネス朝

### (2) アケメネス朝 (BC550年～BC330年)

BC550年、アケメネス朝ペルシャが成立し、メディアを吸収した。

アケメネス朝は、一時期、イランはもとより、シリア全域、エジプト、小アジア半島、バルカン半島の一部までを含む広大な地域を支配した。

**(イランの人々は、この偉大な王朝を先祖としていることを誇りにしている)**



## 2. 古代におけるイランの歴史：その3

### ユダヤ民族のバビロン捕囚とイラン人による解放、エルサレムへの帰還

- (3) BC586年 新バビロニアのネブカドネザルによってエルサレムが攻略され、生き残ったユダヤ人は、バビロンに連れ去られ、そこで建築工事などに従事する幽囚の日々を送った。



左の図は、炎上するエルサレム神殿と連れ去られるユダヤ人の想像画。

このバビロン捕囚をBC538年に終わらせたのは、新バビロニアを滅ぼしたアケメネス朝ペルシャの王キュロスで、ユダヤ人は故郷へ帰還することができた。推定では、その数、20万人という。さらにキュロスは、エルサレム神殿再建の資金まで提供した。

つまり、イスラエルの人々の先祖は、約2500年前には、今のイラン人の祖先によって幽囚の状況から助け出され、エルサレムへ帰還できた。それが、その後のユダヤ民族の形成に貴重な寄与をなした。

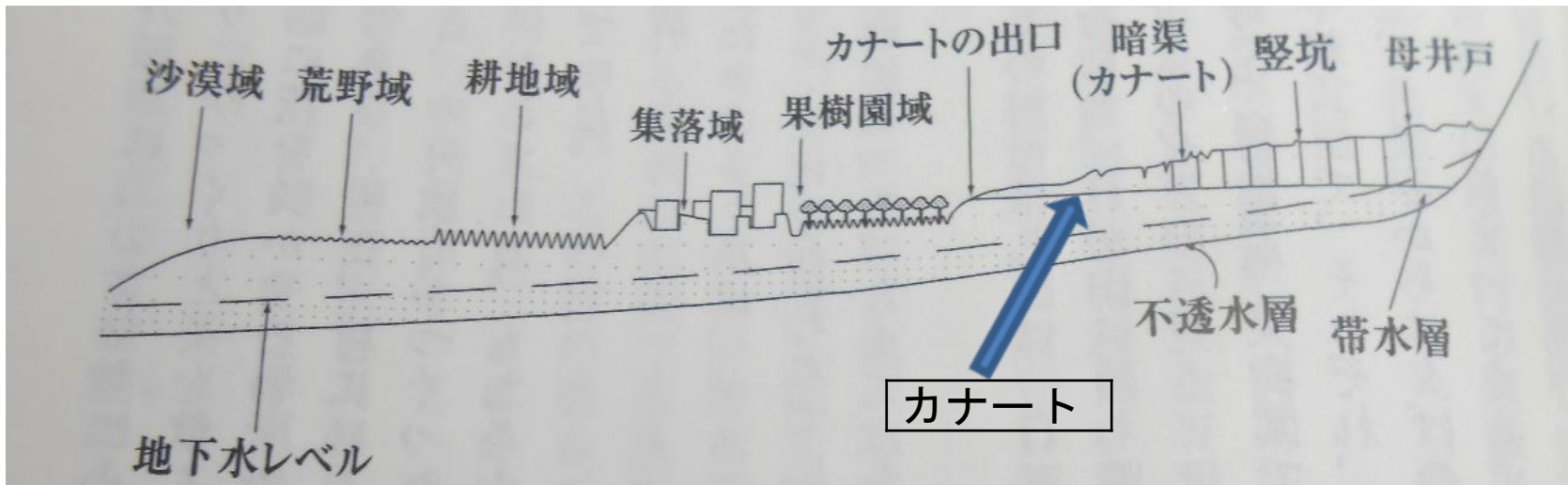
現在、この両国政府は、激しく敵対し合っている。



## 参考説明1 イラン高原のカナート（地下に作られた水路）：その1

貴重な水を、地下水脈から人里へ、蒸発量を極力抑えて導くのが、カナートと呼ばれる暗渠。

カナートの全長は数十kmにも及ぶが、いくつかの「豎坑」（平均間隔30～40メートル）を掘って、そこから横にカナートを繋げる。完成した後も、カナートには土砂が堆積するので、「豎坑」は、土砂除去などのメンテナンスにも必須。



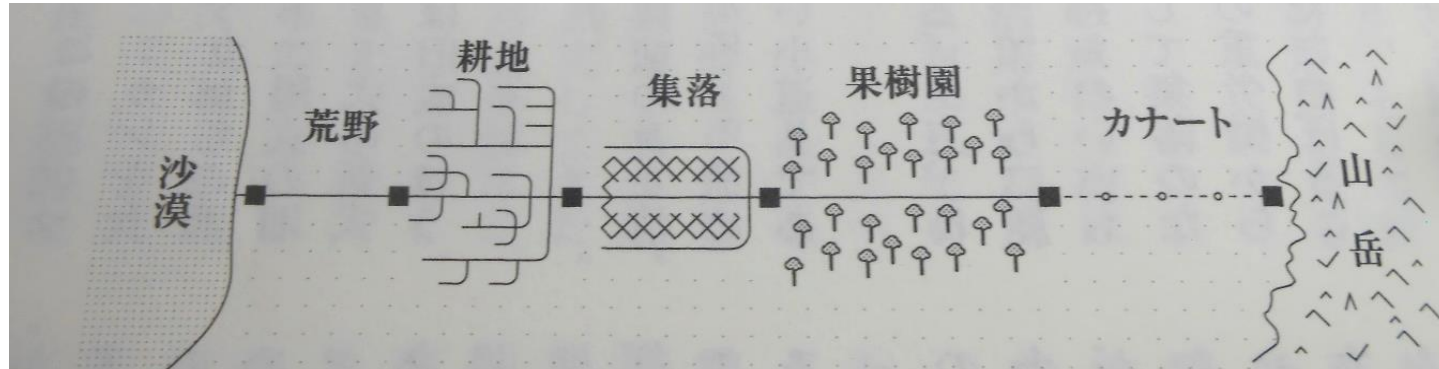
地下水脈を見つけて作る「母井戸」が最も重要で、ここに貯水池を作る。掘りあてるのは長い経験が必要。



## 参考説明1 イラン高原のカナート（地下に作られた水路）：その2

カナートは世界各地にあるが、イランが発祥の地といわれており、最初のもものは、約4000年前に作られた。カナートこそが、優れたペルシャ文明の元とされている。

カナートは、現代でも使われている。現在、イランには3万以上のカナートがあり、長いもので全長29km、母井戸の深さが300mに達する。そのうち、11件が世界遺産に登録されている。



(カナートの内部：インターネット投稿から)

## 参考説明1 イラン高原のカナート（地下に作られた水路）：その3

### 豎坑を掘るための糸巻き機のような機材



（参考用図書8より）

左の図は、豎坑を掘るために糸巻き機のような機材を用いている様子。

これは、現代のものだが、古代にも同じような工夫がなされていたのだろう。豎坑は、最も重要な母井戸が、時には300メートルもの深さのものがある。いかに大変な工事で、かつ、高い技術力が涵養されてきたかが推測できる。

こうした努力が、降雨量の乏しいイラン高原に優れた文明が育まれた源であると考えられる。**イランとは、『古代から、優れた技術によって、自らの国土を作り上げてきた国』**といえるのではないか。

## 2. 古代におけるイランの歴史：その4

### アレクサンダーの東征と、セレウコス朝シリアによる支配

(4) アレクサンダーは、アケメネス朝ペルシャのダレイオス3世をBC 333年、イッススの戦いで破ったのち、東へ進撃を続け、今のイランやアフガニスタンまで含む広範な土地を征服した。

アレクサンダーの死後、麾下の将軍たちに分割された諸国の中で、セレウコス朝シリア(BC 323～BC 248)は、最大で、以前のアケメネス朝ペルシャに匹敵する程の広大な領土を支配下においた。  
(ギリシャ人による支配)



## 2. 古代におけるイランの歴史 : その5

### サーサーン朝ペルシャ (226年~651年)

(5) イラン高原はその後、一時期パルティア (安息国) が支配したが、やがて、イラン人のサーサーン朝 (226年~651年) が、この地域を支配する。

サーサーン朝は強大で、イランを拠点として広がり、アフガニスタン、シリア、エジプト、小アジア半島の一部にまで領域を広げた。

サーサーン朝は、長期間にわたって東ローマ帝国と争いを続けた。

一方、この頃のアラビア半島にはたいした産物もなく、強国から見ると、征服対象にもならず、いわば空白地帯同然だった。この地に、その後、強靱な集団が出現するとは、想像もできないことだっただろう。



# 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その1

## イスラームの勃興

- (1) 610年ころ、アラビア半島のマッカにおいて、ムハンマドが神の啓示を受けて、イスラームの教えを説き始めた。

イスラームの集団は、ごく少人数であったが、その教義はマッカの支配者層の生き方を真っ向から否定するものであったため、迫害を受けた。

- (2) ついに、ムハンマドの命が狙われる事態となり、ムハンマドたちは、622年マディーナに逃亡した。この年がイスラームの始まりとされる。

- (3) マディーナの人々はムハンマドの側についたが、マッカに比べると人口も武器もはるかに少なかった。だが、マディーナとマッカとの数回の戦いの結果、マディーナすなわち**イスラームの側が奇跡的な勝利を収め**、やがてアラビア半島全体がイスラームのもとに統一された。

この時点では、イスラームの軍事力は、まだ、それほど強いものではなかった。

- (4) 632年に預言者ムハンマドが死去した後の、アラビア半島各地の離反を制したリッダ戦争の、絶え間ない戦いを通して、戦略、戦術を鍛え上げたイスラーム軍の武力は、格段に強くなった。

**イスラーム軍は、圧倒的な力を持っていると思われていたサーサーン朝、及び東ローマ帝国との戦いを、同時に始めた。**



### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その2

#### イスラームの武将 ハーリド・イブン・ワリードの活躍

- (1) 初期のイスラームの武将の中で、ハーリドは、傑出した能力で知られている。629年、エルサレム近くのムウタにおいて、イスラーム軍と東ローマ帝国の初めての戦いが行われたが、イスラーム軍は厳しい敗戦を喫した。一兵卒として参戦していたハーリドは、最期に指揮を任されて、巧みな撤退戦を行い、かなりの数の味方兵を、マディーナへ連れ帰り、ムハンマドから「アッラーの剣」と称えられた。
- (2) ハーリドは、リッダ戦争(632年に預言者ムハンマドが死去した後の、アラビア半島各地の離反を制した戦争)においても優れた戦果を挙げた。
- (3) **634年11月のアジュナーダインの戦いで、ハーリドの指揮したイスラーム軍は、初めて東ローマ軍を破った。**この戦いに続いて、ダマスカス始め、シリアの重要な都市がいくつもイスラームに征服され、シリアにおける東ローマ帝国の優位は、あやういものになった。
- (4) その後、ハーリドはカリフの命に応じて、サーサーン朝との戦いに転じ、いくつかの戦いで勝利を重ねた。(ハーリドが、その後東ローマ軍との戦いに転じると、サーサーン朝は戦況を盛り返した。)



### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その3 ヤルムークの戦い ハーリド率いるイスラーム軍の 東ローマ帝国に対する決定的勝利

武将ハーリドは、重要な戦いでは、いつも頼みの綱として指揮を委ねられた。

**彼の最後の戦いは、東ローマ帝国との決定的な戦い、ヤルムークの戦いだった。**

東ローマ帝国が10万人もの大軍を、シリアの北端アンティオキアに終結させ、戦いに臨む、という情報を得たイスラーム軍の総大将ウバイダは、サーサーン朝との戦いに従事していたハーリドを、呼び戻した。これはウバイダが、最重要な決戦を、最高の指揮官ハーリドに委ねるべきと判断したためだった。

指揮を任されたハーリドは、それまで、せっかく苦勞して征服したシリアの諸都市からイスラーム軍を引きあげ、軍団をひとつに纏めるといふ、大胆な戦術を実施した。

それは、10万もの東ローマ帝国軍相手では個々の都市の防衛は不可能と判断したためだ。



さらに、東ローマ軍を、アンティオキアから約600 km離れたシリア南部のヤルムークにおける決戦に、誘い込むことに成功した。

636年のヤルムークの戦いは、6日間に及ぶ死闘となり、イスラーム軍が勝利し、東ローマ帝国は、シリアの地を永久に失うことになった。

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その4

#### イスラーム軍によるサーサーン朝の滅亡

- (1) サーサーン朝は、東ローマ帝国との戦いで国力を使い果たした頃、アラビア半島に勃興したイスラーム軍と戦うことになった。
- (2) **イスラーム軍の不思議なところは、それまでの戦いの中心で、類い稀な戦術を次々と繰り出し、勝利に導いた武将ハーリドがいなくなっても、何とか、苦しい戦いを凌ぎ、勝ち続けたことである。**

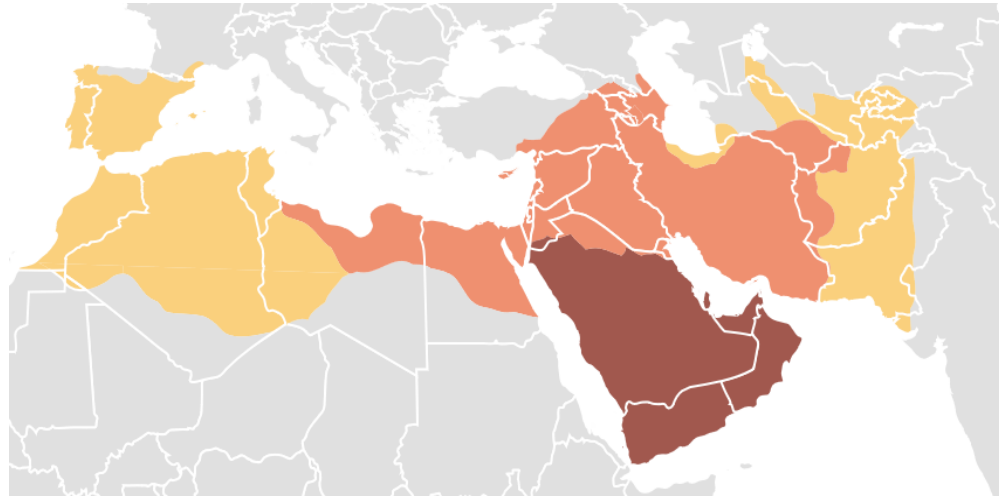
「アッラーの剣」と称されたハーリドは、第二代正統カリフとなったウマルからは、疎まれていた。ハーリドは、東ローマ帝国との決戦となったヤルムークの戦い（636年）の勝利の直後に、ウマルにより軍から離され、隠退の生活を余儀なくされた。

- (3) 636年、今のイラクの都市クーファの近く、カーディシーヤの戦いで、イスラーム軍(3万人)は、兵力の多いサーサーン朝軍(5万人~10万人)を破った。戦いの前半は互角だったが、イスラーム軍が、直前に行われた東ローマ帝国とのヤルムークの戦いに勝利したばかりの軍勢を、カーディシーヤの戦いに急いで送り込んだことが功を奏し、苦しい戦いで勝利を納めた。この戦いの結果、サーサーン朝は、首都クテシフォンを失った。

その後、641年、ニハーヴェントの戦いで、イスラーム軍に対し、3倍の兵力を擁しながら壊滅的な敗北を喫し、サーサーン朝は滅亡した。同じくイスラーム軍に敗れたのに、なぜ東ローマは生き延び、サーサーン朝だけが滅亡したのか？ それは、首都クテシフォンがアラビア半島に近過ぎたことも一因とされる。

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その5

#### 正統カリフ時代 および ウマイヤ朝によるイランの支配



#### イスラームの領土拡大

■	ムハンマド下	: 622-632
■	正統カリフ時代	: 632-661
■	ウマイヤ朝時代	: 661-750

- (1) 上の図からわかるように、イスラームの領土は、正統カリフ時代およびウマイヤ朝時代に、アラビア半島外に、短期間に急拡大したことがわかる。
- (2) ササーン朝が敗れたことにより、イラン地方がイスラームの支配下に入った。だが、イランの人々は、正統カリフ時代およびウマイヤ朝時代には、殆どイスラームに改宗しなかった。その理由は、この時代には、イスラームに改宗しても、アラビア半島以外の住民は、アラビア半島出身者に比べて、差別を受けていたことが、理由の一つにあげられる。  
(なお、「正統カリフ」という呼び名はスンナ派だけのものであって、シーア派は用いない。シーア派は、アリーの前の3人のカリフを本来の統率者と認めていない。)

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その6

#### ウマイア朝打倒の動きはイランから始まった

- (1) ウマイア朝を打倒する反乱の理由のひとつが、  
「イスラームの教えでは、神の前では全ての信徒が平等な筈なのに、アラビア半島出身者とそうでない信者には、税の支払いなどで不平等があるのは、おかしい」というものだった。
- (2) この運動はイラン東部から始まり、その結果、ウマイア朝は倒され、アッバース朝が始まった（750年～）。  
**アッバース朝は、民族の種別を問わず、全てのイスラームを同等に扱ったため、イラン人のイスラームへの改宗は急激に進んだ。**
- (3) イスラームは、正統カリフ時代に、支配地域の急激な膨張に対応して、隔離された軍事駐屯都市（数の少ないアラビア半島出身者が、現地化してしまわないための隔離）の設置、中央への税の取り込みや、その配分方法など、見事な仕組みを構築してはいた。  
だが、もともとは沙漠の民であった彼らには、イランの経験した大帝国の経営力、そのための有能な官僚育成の経験はなかった。

### 3. イスラーム登場後のイラン歴史 : その7

#### アッバース朝におけるイランのイスラーム化、イスラームのイラン化

(1) したがって、イスラームが大帝国を維持していく上では、イラン人の優れた官僚が必要とされ、アッバース朝の中央官庁の要職にイラン人が多数取り立てられた。

同時にイランの優れた文化も全イスラームに広く取り入れられた。つまり、イランとイスラームは互いに大きな影響を及ぼし合った。歴史家はこれを

**“イランのイスラーム化、イスラームのイラン化”**

と表現している。

今日のヨーロッパ文明の根源が、イスラームの優れた文明に依存していることは、よく知られている。バグダードが栄華を誇っていたころ、ヨーロッパの殆んどは、蛮族の集落が点在しているのみだった。

イスラームの文明の重要な根幹を担ったのがイランであるから、今日のヨーロッパ文化は、多くをかつてのイランに負っていることになる。

(2) 他の多くのイスラーム占領地域と大きく異なったのは、ペルシャ語が保持されたことである。(文字は、アラビア文字を基本とした。) そのため、イラン人は、今日、アラブ人ではない。

**(中東で、アラブ人の国でないのは、イランの他、トルコ、イスラエル、アフガニスタンなど、ごく少数。)**

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史 : その8 異民族支配の期間

次の期間、イランは、異民族の支配下にあった。

(1) 正統カリフ時代	641年～661年 (アラブによる支配)
(2) ウマイア朝時代	661年～750年 (アラブによる支配)
(3) アッバース朝時代	750年～9世紀初め (アラブによる支配) (この時代、イラン人は政権の一翼を担った)
(4) トルコ系民族による支配	9世紀初め～ (トルコ民族による支配)
(5) セルジューク朝による支配	1038年～1157年 (同上)
(6) モンゴルの侵入に続く イル=ハン国による支配	1219年～1335年 (モンゴル族による支配)
(7) ティムール帝国の支配	1370年～1507年 (同上)

(イランを、オスマン朝が支配したことは、ない)

860年にもわたる長い異民族支配を終わらせ、再び、イラン民族が主権者となったのは、1501年～のサファヴィー朝時代からである。



### 3. イスラーム登場後のイランの歴史 : その9

#### サファヴィー朝の始まり

サファヴィー朝（1501年～1736年）は、長い異民族支配の後のイラン民族による王朝である。

- (1) サファヴィー朝の成立は、王朝の開始に200年以上も遡る教団（サファヴィー教団）に基づくという点が、他の王朝と異なる。

サファヴィー教団は、いくつもあったスーフィーと呼ばれる神秘主義教団のひとつであった。だが、他の教団と異なるのは、教団主が代々世襲となり、次第に財力と政治力を蓄えたことである。

- (2) いつの頃からか、教団は政治的な野望を抱くようになり、強い武力を持つトルコ民族系の部族集団の支持を得るようになった。

サファヴィー朝が始められた時には、イランの大半はスンナ派であった。

だが、**サファヴィー朝は、早期にシーア派に転向し、その後、100年以上を経て、イラン全体がシーア派の国になった。**

これは、今日の中東情勢全体に関して、極めて大きな意味をもっている。

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史 : その10 イラン全体がシーア派へ

#### (1) なぜサファヴィー朝がシーア派に転向したのだろうか？

諸説あるが、そのうちのひとつが下記である。

『 サファヴィー朝の武力の支えになったのは、トルコ民族系の部族だったが、彼らはイスラームに改宗して間もなかったため、「イスラームの統括者はムハンマドの血縁であるべきだ」というシーア派の教義のほうを受け入れられやすく、“サファヴィー朝の君主は、ムハンマドの血縁者であるという噂（実情は不明）”が、利用された。

そのうえ、当時、長く続いた混乱の中で、スンナ派の法学者は民衆の信頼を失っていた。』

(シーア派になった理由の他の説は、「スンナ派のオスマン朝に呑み込まれないように対抗するため」というものである。だが、建国間もない頃には、混迷していた国内の支配権の確立が急務であって、オスマン朝への対抗にまで気を廻す余裕は、なかったように思われる。)

#### (2) サファヴィー朝の初期のシーア派信仰は、シーア派本流から、異端と非難されるものだったが、サファヴィー朝はシーア派の学者たちを招いて、本来の教義を習得し、それを国民に広めた。

こうして、サファヴィー朝配下の人々が、シーア派に改宗していった。

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その11 サファヴィー朝の期間は 概ね、平和

(1) サファヴィー朝は、初期に、オスマン朝との戦いで大敗北を喫した(\*)が、その後、持ち直した。

(\*)1514年チャルディランの戦い：新興のサファヴィー朝のイスマーイル一世は、それまで無敗を誇り、アナトリア半島東部でオスマン朝のセリム一世の大軍と戦った。この戦いで、サファヴィー朝の騎馬軍団は、銃と大砲を用いたオスマン朝のイエニチェリ部隊に大敗した。以後、騎馬軍団の重要性低下。

1535年にはスレイマン大帝に攻められ、首都タブリーズを失いながらも抵抗を続け、バグダードなど西部の国土を割譲して、オスマン朝と共存協定を結ぶことに成功した。オスマン朝の、東方への進出を阻んだ王朝として知られている。

(2) 周辺国と何度も戦いを繰り返したが、ともあれ、200年以上にわたって領土を保全できたことが、イラン文化の熟成に大きな効果をもたらした。

(3) 現在のイラン・イスラーム共和国が、時には、

**「我々は、サファヴィー朝の伝統を継ぐ者である」**

と語る場合があるほど、その後のイランに、文化的・精神的に強い影響を及ぼしている。

## (参考説明 2) シーア派について : (その1)

**シーア派とは、ムハンマドの跡を継ぐべきなのはムハンマドの従弟アリーと彼に繋がる子孫のみである、と考える宗派である。**

(シーアとはアラビア語で“派”の意味で、当初、シーア・アリーつまりアリーを支持する者たちと呼ばれたが、次第にシーア派と呼ばれるようになった。)

- (1) ムハンマドの従弟アリーはムハンマドの娘を娶っており、彼の支持者達は、アリーこそがムハンマドの後継者であると考えていた。彼は優れた武人としても知られ、バドルの戦いから始まる多くの戦いで活躍していた。  
だが、アリーがムハンマドの葬儀の準備に忙殺されている間に、アブー・バクルが次の指導者に選ばれてしまったと、アリーの支持者たちは、不満を募らせた。(実際にはアリーは若過ぎ、経験・思慮等、不十分だった)
- (2) 結局、アリーが全イスラームの統率者となったのは、ムハンマドの死から24年後(第4代正統カリフ)だった。このときには、マッカ征服後に改宗したウマイア家の勢力が強くなっており、彼らはアリーに従うことを拒み、遂には戦いになった。ウマイア家を率いたのはムアーヴィアだった。  
**戦いそのものはアリー軍が優勢だったが、ムアーヴィアの和議提案に乗せられたアリーは、和議を結んでしまった。**
- (3) ムアーヴィアと和議を結んだことを裏切りと感じたアリーの支持者の一部は、アリーを離れた(最初のイスラームの分派)。彼らは、アリーとムアーヴィア両者の暗殺を企てたが、アリーのみが暗殺された。

## (参考説明 2) シーア派について : (その2)

- (4) ムアーヴィアは、661年に、ダマスカスを首都とするウマイア朝を開いた。アリー亡き後であり、イスラームの大部分が彼に従った。
- (5) アリーの息子フサインは、680年ウマイア朝に反対して、わずかな味方とともにマディーナを出発し、マッカで祈りをささげた後、クーファのアリー支持者たちのもとへ向かったが、ウマイア朝は、クーファのアリー支持者たちを抑え込んだ。



### カルバラーの悲劇

- (6) フサインは、クーファ間近のカルバラーで、ウマイア朝軍に襲撃された。女性、子供を含めて、わずか72名のフサインたちは、3000名のウマイア朝軍を相手に壮烈な覚悟の戦死を遂げた。



## (参考説明 2) シーア派について : (その3)



- (7) 戦いの場所にちなんで、**カルバラーの悲劇**と呼ばれるこの出来事は、シーア派の意気を消沈させるどころか、激しく高揚させ、勢力が拡大するきっかけとなった。
- (8) シーア派特有の、**アーシュラー**と呼ばれる、やや荒々しい祭り(自分の身体を鎖で打つ)は、この悲劇を追悼し、フサイン一行を救いに行けなかったクーファの人々の悔恨を象徴して、毎年行われる。



## (参考説明 2) シーア派について : (その4)

(9) シーア派では、イスラームの指導者をイマームと呼ぶ。シーア派の中の最大勢力の12イマーム派は、イランで多数派を占める。

アリーから数えて12代目のイマームは、暗殺を避けるため、幼い時から所在を隠されていた。スンナ派の人々は彼の存在を認めないが、12イマーム派の人々は、彼が今なお幽隠状態（ガイバ）に入っており（隠れイマームと呼ばれることもある）、いつの日か再臨して、イスラーム社会を統率する、そのときに、神が最後の審判を下し正義が実現される、と信じている。

(10) シーア派は、全イスラームのうち10%とされるが、これは、圧倒的に数の多いアジア、アフリカのイスラームの中に、シーア派が殆どいないためなのであって、中東では、シーア派とスンナ派の数は、そこまでの差はない。

中東各国のシーア派の割合は、下記のとおり。

イラン	: 90~95%	イラク	: 65~70%		
イエメン	: 35~40%	シリア	: 15~20%	レバノン	: 36%
サウジアラビア	: 10~15%	エジプト	: 1%未満		

### 3. イスラーム登場後のイランの歴史：その12

#### ガージャール朝（1796～1925年）

#### 英国及びロシアに侵食された混迷の時代

- (1) ガージャール朝は、各部族連合の集まりであり、権力の集中がなされず、英国及びロシアの帝国主義的な浸食により、多くの権益を奪われ、植民地に近い混迷の時代であった。  
この王朝の間に、アフガニスタン、ジョージアなどを失ない、ほぼ現在のイラン領土が定まった。
- (2) 1905年の日露戦争における日本の勝利は、長くロシアに苦しめられてきたイランの人々に衝撃を与えた。日本と同じ立憲国家を目指す運動が起こり、**1906年、中東で初めての立憲国家となった。**だが、混迷は続いた。
- (3) 1907年の英露協商は、イラン内の経済権益を、両国が勝手に切り取り合う条約であり、これによってイランの混迷はさらに深まった。
- (4) **イランにおける石油発見は1908年**（サウジアラビアにおける油田発見は1938年）
  - 1830年 アゼルバイジャンのバクーにおける最初の石油精製
  - 1859年 米ペンシルヴァニアにおける油田発見、米国が最大石油産地に
  - 1908年 米フォード社が自動車の量産開始、ガソリンの需要急拡大
  - 1908年 イランにおいて、英国人技師による中東最初の油田発見**  
**以後の長期間の英米による収奪とイランとの確執の元に**
  - 1913年 英国海軍の燃料を石炭から石油へ変更

## 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史：その1 パフレヴィー王朝の全容（1925～1979年）

(1) イラン北部出身の軍人レザー・ハーンが、クーデターによりパフレヴィー王朝を開いた。（1925年）

レザー・ハーンの実施した評価できる点

- ・ 近代的な法整備、強い軍事力を実現
- ・ 対外不平等条約の撤廃に成功
- ・ 学校制度を拡充させ、教育を受ける者が増加した
- ・ 産業の育成、道路の整備を進めた
- ・ イスラーム色を弱め、これにより、女性の社会進出が活発化

(2) レザー・ハーンは、トルコのケマル・アタチュルクの政策に倣おうとした。アタチュルクは、オスマン帝国皇帝を追い出し（1922年）、トルコの政治をイスラームの影響から切り離し、近代化を着実に進めていた。

(3) **だがレザー・ハーンは、アタチュルクの最も重要な政策を無視した。それは、権力を自分の一族に継がせるのではなく、選挙により次の指導者を選ばせたこと、つまり民主主義をトルコに根付かせたことである。これこそがアタチュルクの最も偉大な功績であった（当時の中東イスラーム圏で唯一）。**

**王朝維持しか念頭にないレザー・ハーン政治は、真似事でしかなかった。**

(4) パフレヴィー王朝は、強権的な政治を続け、結局は、王が多くの国民を恣意的に殺す国となってしまう、国民の反乱により滅亡する。

## 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史 : その2

### 第二次世界大戦中の英ソの侵略と石油利権の行方

- (1) 1939年に始まった大戦に、イランは中立を宣言した。しかし、英ソに対抗するためドイツとの接近を図ったイランに、1941年、英ソ両軍が南北から侵入した。

レザー・ハーンが大金を投入して作ったイラン軍は英ソ両軍に全く歯が立たず、国土は侵略され続けた。

このため、レザー・ハーンは退位し、息子のムハンマド・レザー・シャーが新たな国王となったが、新国王の権力は弱かった。

- (2) 石油利権の行方

英国は、契約によりイランから石油の探査及び掘削権を得て、1908年、原油を掘り当て、石油生産を成功させた。

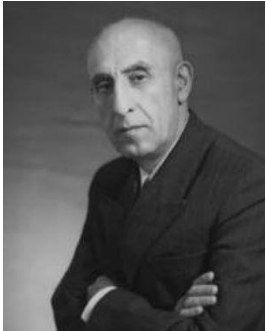
だが、石油権益が膨大な額に膨れ上がった後も、長期間にわたって利益をほぼ独占し続けた。純益の16%をイラン王室に提供したが、これは、英国の莫大な利益を確保するための、賄賂に近い性質のものと考えられることもできよう。

自国の貴重な地下資源の恩恵を全く受けないことに、イラン国民の不満が蓄積した。

## 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史：その3

### 石油の国有化、英国による経済封鎖

(1) イランの石油の利益の殆どを独占する英国に対して、一定の利益を渡されていた国王周辺を除くイラン国内の反発は膨れ上がった。



選挙で選ばれたモサデク首相は、1951年、イラン石油の国有化を宣言した。石油精製施設のあったアバダンから、英国の技術者を追い出し、国有化を実現させた。

(石油の国有化を実現したイランのモサデク首相)

(2) 凄惨な第二次世界大戦後、平和な世界を目指して国際連合が作られた。

その憲章には、「正義と条約その他の国際法の源泉から生ずる義務の尊重とを維持する…」と記され、英国は常任理事国となった。

英国は、イランによる石油国有化を、国連の重要機関の国際司法裁判所に提訴したが、却下されると、無法にも武力に訴えた。“国連による平和”を標榜しながら、その常任理事国が平然と国連の決まりを破るのは、発足当時から始まっている。

英国は、大手国際石油会社にイランの石油を買わないよう呼びかけ、同時に海軍艦艇を派遣して、中小の石油会社が買い取りに動くのを武力で妨害した。

**そのため、イランの石油売却はゼロになり、イラン経済は困窮した。**

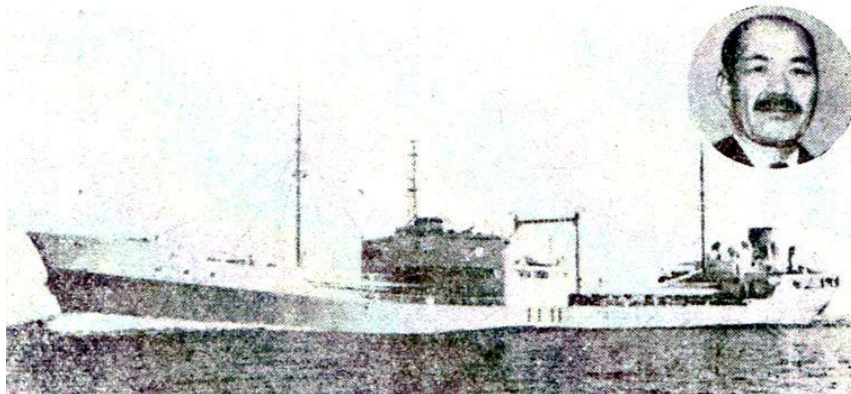
# 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史 : その4

## 日章丸による石油購入

(1) 当時の世界の石油市場は、欧米の石油メジャーに支配されていた。出光興産の出光佐三(いでみつ さぞう)は、敗戦国日本の経済振興のためにも、独自の石油輸入を試みたが、メジャーに阻まれ、実現できなかった。



(2) 彼は、イランに対する英国の措置は国際法上、不当なものと考え、イランから直接、石油の買い付けに動いた。苦労の末、密かにイラン政府との契約を結ぶのに成功した後、1953年4月、自社のタンカー日章丸(全長136m、当時の日本の最大のタンカー)が、英国海軍の封鎖を通り抜け、イランの石油精製施設のあるアバダン港に接岸した。イラン国民は、日本人の勇気に感嘆し、熱狂的に歓迎した。



左図は日章丸(写真是新田船長)



## 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史 : その4

### 日章丸による石油購入 (続き)

- (3) 石油を急いで積み込み、帰路も英国海軍の封鎖を巧みに躲して、日本に帰国した時は、敗戦の傷跡に苦しんでいた多くの日本人から喝采を浴び、全世界が、出光佐三の行動力に驚いた。
- (4) 英国は、日本の裁判所に、“日本に持ち込まれた石油は英国のものだ”と訴えたが、敗訴した。

**【注記】** 近代イランは、この段階までは、英国とロシア・ソ連に苦しめられていた。

米国は、むしろ英国に敵対して、イランを支援していた。イラン人から見ると、米国は自国の独立戦争でも、1812年からの米英戦争でも、英国と敵対し、“敵の敵は味方”という考えからしても、米国を味方と期待した。

**米国は実際に、立憲革命後に財政担当者を送るなど、イラン国民の味方をした。**

**だが、この期待は、次に示すCIAの謀略によるクーデターで、裏切られた。イラン国民からすると、米国は“かつてイラン国民が信頼したのに、それを裏切った国”となった。**

- (5) 日章丸による石油買い入れは、何度か行われたが、間もなく、米国CIAの陰謀によるクーデターが発生し、契約相手のモサデク首相が失脚し、石油権益が、英国と米国、国王に占有されたため、途絶えた。

## 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史 : その5

### 米国CIAの陰謀クーデターによるモサデク首相の失脚

- (1) 自国の権益を守る企てに悉く失敗した英国は、米国にイランの石油権益の一部を渡す密約を提示して味方に引き入れた。**米国は、対ソ蓮包囲網の拠点構築も狙ってこれに応じ、イランを裏切った。**
- (2) 民主主義の盟主を装おっているながら、米国は、**1953年8月、CIAによる陰謀でイラン国内にクーデターを起こさせて、モサデク首相を失脚させ、莫大な石油権益を得た。** 米国も英国と同様、国連の常任理事国でありながら、早々に国連の標榜する理念を裏切った。
- (3) 選挙により正当に選ばれ、国民に人気のあった首相を、陰謀によるクーデターによって失脚させた米国を、イラン国民は深く恨んだ。

**これが、今日まで続く、イラン側から見た、イランと米国の根深い対立の始まりである。(米国民の認識度は極く低い)**

- (4) (私見) 当時のイランは、立憲革命の機運にあり、選挙でモサデクを首相として選び、自由と民主主義の道を進み始めていた。モサデクは、スイスで法学博士となり、帰国後、国会議員、大臣を経験。イスラーム色は薄く(それゆえ宗教人の反感は強かったが)、イランの人々にとって貴重な指導者だった。

**イランは天然資源に恵まれ、重要な経済的基盤を作ることができた筈であり、中東では稀な、自由な民主主義国家となる可能性は、わずかでも、あったのに、米国と英国が、それを潰したと考えることもできよう。**

## 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史 : その6

### 国王による恐怖政治

- (1) 米国によるクーデターで権力を握ったレザー・シャー国王は、次のような白色革命と呼ばれる施策を行った。評価できる施策もあったが、多くはさまざまな問題を招いた。
- 1) 識字率の向上: 学校制度の改革により、5%しかなかった識字率を50%まで向上
  - 2) 農地改革により、大地主の土地を買い上げて農民に分配したが、農民たちは灌漑のための資力がなく、土地を放棄して都市部に流れスラム化し、農業生産高は減少。
  - 3) 世俗化 - 信心深い者たちは反発したが、女性は選挙権を認められ、社会進出した。
- 総じて、社会の格差が増し、貧困層が増大して、国民の不満が高まった。
- (2) 中でも悪名高いのは、米国CIA、FBIとイスラエルの情報機関モサドの協力のもとに作られたSAVAK（国家情報治安機構 3万人～6万人）で、国民同士を相互密告しあう仕組みを作り上げ、多くの国民を不当に逮捕し、拷問・虐殺した。こうして国王への怨嗟が高まった。
- (3) **しかし、NYタイムズは“国民の大多数が国王の政策を支持している”という誤報を流し続けた。そのためもあって、米国民は今でも、1979年のイスラーム革命による国王追放以前のイランの姿を、よき社会と誤解している人が大勢いると思われる。**
- (4) また、米国からの兵器購入により、国王に忠実な強力な軍隊が作られた。

# 4. パフレヴィー王朝下のイランの歴史：その7

## 革命前夜

イラン王政の混迷に、米国は気づかなかった

### (1) ホメイニー師による非難

国王は、多くのイラン国民の反発を受けたが、イスラーム法学者たちもその先頭に立った。中でもホメイニー師は1964年に「国王独裁とそれを支える米国並びにイスラエル」に対して厳しい非難演説を行い、逮捕され、国外追放処分を受けたが、国外にいた故、かえってカセットテープによる反国王演説を自由に配布し続けることができ、運動の中心となった。

(ホメイニーは、「ガイバ(幽隠)の状況におわす12代イマームが世の中に現れるまで、イスラーム法学者が政治において、その代理を果たすべき」という思想の持ち主だが、高位のイスラーム法学者たちの中で、その考えを持つものは、ごく少数。

なお、ホメイニー師でさえ、イスラーム法学者の中では、最高位ではなかったとされているが、ホメイニー師指名により現在の最高指導者になっているハメネイ師は、法学者の中では明らかに最高位から2段は格下の人物と言われ、さまざまな軋轢が生じているとされている。)

### (2) 米国は、イラン王政に対する国民の反感を感知せず

1977年12月、イランを訪れた米国のカーター大統領は、イランを「中東の安定の島」と表現し、「国民から愛された国王」と褒め称えた。

これはCIAがイラン情勢の把握を全面的にSAVAKに任せていたため、カーター大統領に、ひどい誤りの情勢報告がされていたもので、CIAの大きな失態だった。

# 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その1

## パーレヴィ王朝崩壊に伴う新たな体制の始動

(1) 王政に反対したのは、イスラーム法に基づく統治を目指す者、自由で民主的な政治を目指す者、など、さまざまな勢力であった。

国民の怨嗟は高まったが、王制は、王により利益を得ていた者たち、忠誠を誓う強力な軍隊、国民の中に周到に張り巡らされたSAVAKの情報網等により、強固に護られており、打倒は容易ではなかった。

**強固な王制を打倒するには、宗教的な熱狂が、大きな要因となったことは事実であり、**そのため、王政打倒後のイランが、強い宗教色を持つことになったが、それは、イラン人にとって、いかなる意味をもったのだろうか？

(トルコ革命は、宗教を政治から追放した。日本の明治維新には宗教色はない。)

(2) 1979年1月、国王は国外に脱出せざるを得ない状況に追い込まれた。王が国外に逃れた直後、ホメイニー師が帰国して、イラン王政は崩壊した。

(3) 王政の崩壊後、主導権争いが生じたが、イスラーム法に基づく政治を目指す集団は、組織力、団結力共に他の集団より優れ、**国民による選挙の結果、彼らが圧勝し、イスラーム法に基づく政治を行う憲法が、国民の投票で定められた。**

こうして、数百年におよぶ英国、ロシア、米国など外国勢力の長い干渉を排除した国民の国家が誕生した。

**イランは、イスラーム法が支配する、世界で唯一の国になった。**

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その2

### イスラーム革命の目指したもの

- (1) イスラーム圏には多数の王国があるが、そこでは王が恣意的に支配するのであって、イスラーム法が支配しているのではない。**イスラーム法が支配する国家が周辺に現れるのは、独裁政治の王にとって悪夢である。**

イランとサウジ・アラビア他との対立を、「シーア派とスンナ派の宗派の対立」と見てしまうのは、あまりに短絡的で、しばしば誤った見方となる。

**「イスラーム法の支配」と「王の恣意的な支配」との対立** と考えることも有効であるし、或いは、単に勢力争いと考えべきかもしれない。

- (2) 中東の多くの国は、西洋的近代化、つまり宗教と政治の分離を目指して独裁政治が続けられてきた。しかし、その結果は、独裁者周辺の一部の者たちへの富の集中であり、国民の多くが貧困にあえぐことになった。

**イラン・イスラーム革命は、初期のイスラーム時代への回帰というより、多くの国民を救うという現代の社会主義的側面を有していたこと、だからこそ、革命直後、多くの国民の賛同を得た、という評価もできる。**

だが、現在は、最高指導者周辺の者たちの利権をめぐる汚職がひどい。



## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その3

### 革命に対する各国の反応

米国	米国は、パフレヴィー王朝に肩入れし、24000人もの軍事顧問団がイランに常駐し、対ソ連包囲網の重要な国としていたのに、それが一挙に失われた。また、大使館員人質事件により威信を傷つけられたこともあり、新生イランに激しく敵対。
イラク	イラクの70%はシーア派であり、支配者フセインは少数のスナ派（スンニー派）であったので、イラン革命の国内への浸透を恐れ、イランに対し戦争を仕掛けた。
イスラエル	イラン・イラク戦争の際は、イラクを敵視するあまり、イランに武器支援。 現在では、イランとは、激しい敵対関係にある。
シリア	シリアのアサド政権は、近隣諸国で唯一、革命後のイランを支持した。そのため、後に、シリアが混迷に陥った時に、イランはアサド政権を支持。
サウジ アラビア	国王独裁国家であるサウジは、革命後のイランに敵対。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その4 米国大使館員人質事件 (1)

### (1) 元国王の逃避行

国民の怨嗟の的となっていた元国王は、エジプトに逃れた後、いくつかの国を経て、癌の治療のため、米国への亡命を希望したが、当初、カーター大統領は、新生イランとの軋轢増加を懸念し、亡命を許可しなかった。

### (2) イラン学生による米国大使館占拠、52名の人質

カーター大統領が、ついに元国王の入国を認めると、イラン国民の米国に対する怒りが爆発した。かつて、自分たちの選んだモサデク首相を失脚させて、石油利権を奪い、王制により、長い間国民を拷問するなどの苦しみを与えてきた黒幕は米国であり、その暗躍は、米国大使館を根城としていたのは明白だった。

1979年11月4日、学生たちが壁を乗り越えて米国大使館へ乱入するのを、イラン政府は黙認した。米国の大使館守備兵は、さらなる混乱を避けるために、銃撃を抑制した。

こうして、52名の米国人の大使館員他が、444日にわたり、監禁される事態となった。米国民の大多数は、26年前に米国がイランのモサデク首相を陰謀で失脚させて以来、イラン国民の強い怨嗟の的であることを自覚していないため、この事件が、イランとの確執の始まりと考えている。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史：その4 米国大使館員人質事件（2）

### （3）人質の扱い

イラン政府の声明では、「人質は人道的な扱いを受けている」としていたが、米国民からすると、ひどい扱いをされた者もいたらしい。そのため、米国民はさらに激高し、イランに対する敵意と不信は、増加した。



### （4）人質奪回作戦の失敗

人質解放の交渉は全く進まず、国民に迫られたカーター大統領は、1980年4月24日、ついに武力による人質奪回作戦を実施させた。

だが、作戦は、救出機同士が接触事故を起こすなどのミスのために失敗した。

### （5）パーレビ国王が死去すると、大使館員を人質に取る名目がなくなり、ようやく交渉が進み、444日後に、人質は全員解放された。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その5 イラン・イラク戦争(1) (1980年~1988年)

### (1) イラクとイランの以前からの関係

イラクは、第一次世界大戦の後に、欧米列強の勝手な線引きで生じた歴史の浅い国で、イランに比べると、人口で半数、国土は1/4しかない。イランからはパフレヴィー王朝時代にも強い圧力を受けており、国境線をイランの主張通りに変更させられたこともあった。

### (2) イラクは少数派のスニ派が政権を握っていた

イラクは60%以上がシーア派なのに、それを少数のスニ派が抑えていたため、イランでシーア派による政権ができたことは脅威となった。実際にイラクのシーア派は、反政府運動を始めた。そのため、イラクのフセイン大統領は、恐怖に駆られ、イランに戦争をしかけた。

### (3) 初戦は、不意を突いたイラク軍が優勢

1980年9月22日、イラク軍は、不意を突いてイランに攻め入った。準備のできていなかったイラン軍は、部隊同士の連携も悪く、深く領土を侵略され、空軍が何とか反撃したほかは、防戦一方だった。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その5

### イラン・イラク戦争 (2) (1980年~1988年)

#### (4) イラン義勇兵による巻き返し

著しく不利な状況に追い込まれたイランを救ったのは、国を救おうとイラン革命防衛隊の募集に応じた大勢の義勇兵だった。彼らは、近代兵器を用いて攻撃してくるイラク軍に対し、人海戦術で対応し、多くの犠牲者を出しながら、戦況を凌いだ。

#### (5) 欧米各国は、革命イランを敵視してイラクを支援し、イラクが公然と毒ガス兵器を用いても、非難しなかった。

#### (6) 欧米各国は、平和を追求すると広言しながら、イラン・イラク戦争では、自国の利益を剥き出しに優先し、第二次世界大戦より長く戦争が続くのを止めようとしなかった。それどころか、両国に武器を売って巨額の利益をあげた国連・常任理事国の責任が問われるべきである。

両国合わせて、100万人もの死者が出たとされる。また、ミサイルを撃ち合った初めての戦争であった。

#### (7) イラクは欧米各国の支援により大量の武器を手に入れた。イランとの戦争後、間もなく、イラクはこれらの武器を用いて、クエート侵略を行なった。

#### (8) ホメイニーは、この戦争を国内引き締め利用した。



## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その6

### イラン革命防衛隊

- (1) 1979年のイスラーム革命当時、イラン国軍は、前国王が育て上げ、米国から購入した大量の兵器により強大な軍事力となっていた。  
国軍は、前国王に対して忠誠を誓っていた。
- (2) 前国王を倒した革命勢力にとって、国軍は“敵側の組織”と考えざるを得なかった。したがって、革命路線を守るために、自前の軍事組織を作らねばならないと考えた。その結果、できたのが、イラン革命防衛隊である。
- (3) 彼等は、発足時には“革命を守る”という目標だけを持っていたが、国軍に比べて弱小であった。だが、革命後間もなくイラクから仕掛けられた10年にも及ぶイラン・イラク戦争には、イラン革命防衛隊に志願した若者たちが戦い、国土防衛に成功した。この戦争を通じて、イラン革命防衛隊は勢力を増した。
- (4) 現在は、国軍にはないミサイル・ロケット部隊を有し、対外活動を独占するなど、特異な地位を保持している。  
また、軍事だけではなく、経済面でも独自の企業群を所有し、イラン経済全体に、強い利権を持っている。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その7

### 米軍によるイラン民間機撃墜 290名死亡

- (1) イラン・イラク戦争の末期、1988年7月3日、この悲劇は発生した。イラン民間航空機の、子供66名を含む290名の人々が亡くなった。
- (2) 約1年前の、米海軍艦艇が同盟国に誤爆された事件が、悲劇の引き金に  
イラン・イラク戦争において、米軍はイラクを支援していた。しかし、1987年5月米海軍のフリゲート艦スタークが、味方のイラク空軍機によって、イランのタンカーと誤認され、ミサイル2発の襲撃を受け、兵士37名が死亡、21名が負傷した。  
米海軍スタークは、接近してくる戦闘機をイラクのものと認識しており、まさか攻撃を受けるとは、予想もしておらず、ミサイルに対する防護機能を発動しなかった。  
この事故の後、米海軍は、**交戦規程を、「必要に応じて、先制攻撃も可能」と改定した。**これが、翌年の悲劇を生むことになった。

#### (3) 1988年 7月3日

- 1) 米海軍の巡洋艦ヴァンセンは、ホルムズ海峡において、民間タンカー警護にあたっていたが、近くのイランの民間国際空港に、イランの軍用機F14が配備されているとの情報を入手していた。  
民間機が空港を離陸したとの情報を入手するも、同じ場所から、F14発進との情報も入り、混同。



## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その7 米軍によるイラン民間機撃墜 (続き)

(3) 1988年7月3日 (続き)

- 2) さらに、艦首側の砲塔がトラブルで使用不可となり、艦尾側の砲塔を使用するため視界を広げようと、全力航行中の急な転舵を行ったため、**指揮所の資料や物品が散乱し、混乱が生じた。そのうえ、イラン領海内に誤って入り込んでしまったことがわかり、いつ攻撃されてもおかしくない状況を自覚して、恐怖に晒された。**
- 3) ヴィンセンスの艦長は、レーダー上で接近してくるイラン民間機を、イラン空軍のF14戦闘機と誤認し、近寄るなと警告したとのことだが、万一、民間機側が受信しても、警告されているのが自分の機だと思った筈がない。
- 4) 距離16kmに近づいた時に、ヴィンセンスの艦長はミサイル発射を指示、民間機は撃墜され、罪のない民間人290名全員が死亡した。  
撃墜直後に、ヴィンセンス側は民間航空機と理解したが、遅すぎた。
- 5) 後になって、ヴィンセンスの艦長他は、①レーダー反射量が大幅に異なる民間機と軍用機を間違えたこと、②接近しつつあったとはいえ、高度を上げつつあった民間機を、高度を下げつつ襲撃してくる軍用機と勘違いしたことなど、初歩的で重大な過誤を犯したと、厳しく非難された。

**これは、自分たちが殺されてしまうという極限の恐怖に怯え、パニックに陥った結果、犯した誤りであった。**

# 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その7

## 米軍によるイラン民間機撃墜 (続き)

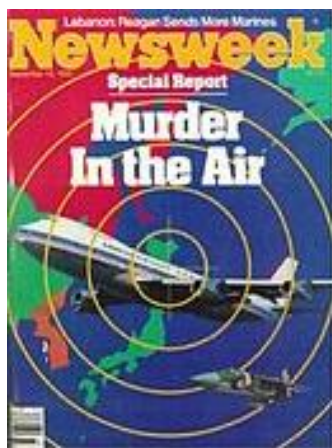
### (4) 事故後

- 1) イラン側は、領海侵犯を犯した米軍に民間機を攻撃され、290名もの罪なき人々が殺されたことに激怒した。(毎年、追悼行事が行われている。)
- 2) 米国は、最終的に、被害者に慰謝料を支払うことに同意したものの、正式な謝罪は、一切行われていない。米国大統領ブッシュは「我々は決して謝罪しない」と声明を出した。

パニックに陥ってミサイル発射を指示し、290名の無辜の民間人を殺害したヴィンセントの艦長に、米軍は、何の処分も下さなかった。

- 3) イランは、この悲劇を忘却しないための切手を発行。

米国NEWS WEEK誌は、“Murder In The Air“の特集号を出した。米国の中でも良識人から見れば、これは明らかに『米軍による大量殺人事件』だった。



# 5. イスラーム革命後のイランの歴史：その8

## イランの歴代大統領

代	任 期	氏 名		備 考
3	1981～ 1989	アリー・ ハーメネイー		ホメイニーの忠実な部下及び同志。
4	1989～ 1997	ハーシェミー・ ラフサンジャニー		現実主義穏健派。父はイスラーム法学者。 モサデクの信奉者。 だが、実像は汚職と腐敗そのものという 評価もある。（山内昌之氏）
5	1997～ 2005	モハンマド・ ハタミー		穏健派。父は最高位の法学者。ヨーロッ パとの融和に成功した。最初は圧倒的に 支持されたが、経済運営に失敗。
6	2005～ 2013	マフムード・ アフマディーネジャード		宗教的急進派。貧困層出自の技術者。 2009年の再選には、不正があったと して、大規模な反対デモあり。
7	2013～ 2021	ハサン・ ロウハニー		保守穏健派。英国に留学経験。博士。 反シャー運動に参加。元空軍司令官。
8	2021～	エブラーヒーム・ ライースイー		保守強硬派。2017年選挙でロウハニー に僅差で落選。2021年の選挙で当選。 検事総長、司法府長官を歴任。



## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その9

### イランの原子力開発と疑惑

- (1) イランは、1974年にIAEAに参加、本格的に原子力研究を開始し、人材育成などを始めた。  
だが、1979年のイスラーム革命と共に、ホメイニーの反対により中止。
- (2) ホメイニーの死後、研究は再開され、2011年に、ロシアの協力により、唯一のブシェール原子力発電所(100万KWe)が、発電を開始した。  
(ペルシャ湾沿いに、1974年から建設していたもの。)
- (3) 一方、2002年、イランの反体制派が、「イランはIAEAに無届けで、原子力施設をもち、原子力爆弾開発を目指している」と主張。  
イランは、「研究用原子炉のため、20%濃縮を目指しているだけ」と主張するも、IAEAに無届けであったのは事実で、国際問題に発展した。  
イスラエルが、空爆による施設破壊も辞さないと声明するなど、緊張が高まった。(イスラエルは、1981年に、イラクの原子力施設を爆撃し、国連の非難決議を受けたが、イスラエルは国連決議を、常に無視。)
- (4) イランに対して、経済制裁が加えられ、イランは困窮。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その10

### イランとの核合意とトランプの一方的離脱

- (1) 保守強硬派のアフマディーネジャードが大統領のときは、核合意の交渉余地は、なかった。しかし2013年の選挙で、欧米との融和によって、経済の好転を目指したロウハニ師が大統領になると、交渉が進展した。2015年7月、苦労の末に、ようやく結ばれた核合意のもとで、イランは濃縮作業を制限し、制裁解除によって、イラン経済は好転し始めた。イラン国民の多くは核合意を歓迎したが、保守強硬派は、イランの主権を損なうとして反対のままである。
- (2) しかし、2018年5月、トランプは、せっかく辿り着いた核合意から離脱すると、宣言した。理由は、次のとおりである。
- 1) イランによる核開発に対して、10年～15年という期限が設けられているが、期限を過ぎれば、イランは核兵器の開発を進めるに違いない。
  - 2) 弾道ミサイルの開発を制限していないため、イランはイスラエルも射程に収める中距離弾道ミサイルの発射実験を行うなどしている。
  - 3) アメリカが「テロ組織」と看做す周辺国の勢力を、イランが軍事的・経済的に支援している現状が、野放しになっている。
- これらの主張は、いずれも、合意時からわかっていたことで、イスラエルやサウジアラビアは合意に反対していた。

## 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その10

### イランとの核合意とトランプの一方的離脱 (続き)

(3) イラン穏健派の立場からすると、

- 1) もし10~15年後に核兵器開発を始めたら、当然、厳しい経済制裁が行われる。それはイランにとって不利益なのだから、核開発をしないのは明らか。
- 2) ミサイル開発は、どの国でも実施している。(北朝鮮のミサイル開発をトランプは容認)
- 3) イランが生き延びるために、周辺国で味方をしてくれる勢力を支援するのは、どの国家もしていること。イランは、ISのようなテロ組織は攻撃している。

(4) イスラエルの国際法違反に対して、欧州各国は殆ど黙認し、米国は支援している。

イラクがクエートを侵略した時に、多くの国々がイラクに侵攻したが、イスラエルが無法に領土を拡大しているのに、欧米は何もしない。

イスラエルが核兵器を所有している疑いは濃厚なのに、IAEAの査察もされない。

イスラエルが、傲然と行っているパレスチナ人への抑圧／時に殺傷は、ジェノサイド (大量虐殺、集団の抹殺) とみなされるべき。

米国は、イスラエルの無法な領土拡大等への国連非難決議に、繰り返し拒否権を発動し、国連を機能不全に陥らせている。

# 5. イスラーム革命後のイランの歴史 : その11

## イランとの核合意復活の可能性

### (1) イランの苦境

トランプのしかけた経済制裁は、米国の経済力によって、日本他を脅迫して従わせ、イラン経済を疲弊させている。明らかに、経済テロといえるものである。

(中国は、変則的手段でイラン原油を受け入れか?)

イランには殆ど打つ手がなく、イラン国民の状況は悪化するばかりである。必然的に、イラン国内で、対欧米強硬の保守派が勢力を伸ばし、国際情勢が混迷する。

### (2) 核合意復活の可能性 : どうなるのか、見通しは困難

イランが米国に対し、イスラーム革命防衛隊を外国人テロ組織の公式リストから削除するように要求したことで、進展が止まってしまった。

- 1) 復活しないケース。イランを数少ない味方に留めたいロシアとしては、望ましい。  
イランは西側諸国を敵に廻すことになる。

イランが核開発を進める ⇒ 中東で自在にサイバーテロを操れるイスラエルは、イランの核開発関係だけでなく、種々のインフラを破壊し、イランが今以上の混乱に陥る。

- 2) 復活するケース。米国中間選挙直前に、バイデン政権の不利挽回の可能性？  
イランの原油が大量に出回る。⇒ 米国のインフレの抑制 ⇒ 中間選挙で、与党有利に？

## 6. 破綻国家を増やさないために（その1） 私見

### （1）破綻国家（Fragile States 失敗国家ともいう）とは何か？

破綻国家とは、国民の安全、水、食料などを保証できない国を指す。ソマリア、イエメン、シリア、アフガニスタンなどが、相当すると言われる。世界で最も不幸な国民は、破綻国家の国民だろう。

破綻国家の定義に相当しなくても、ニカラグア、ホンジュラス等、中米の多くの国は治安が悪く、殺人発生率は、日本の100倍以上である。

これらの国の国民は、家族の安全を望んで米国に向かう。その流れを止めるには、これらの国の状況を変えるしかない。

（急増する世界の人口も、本質的な問題のひとつ）

スリランカも破綻国家に陥らないか、心配される国。

### （2）世界が最優先すべき課題

世界中のどの国家も、たとえ信条が異なっても、他の国を破綻国家に追いやるような施策を採るべきではない。

### （3）トランプの米国が行ってきたこと

**トランプ率いる米国が、イランに対して行ってきたのは、「米国大統領再選を目的として、福音派の歓心を買うために」イランを混乱させ、結局、イランを破綻国家に陥らせることのように見える。**



## 6. 破綻国家を増やさないために（その2） 私見

(4) 米国が、ソ連とともに作り出した破綻国家の例： アフガニスタン

1) ソ連の共産主義革命以後、米国は「反共産主義」を国是としてきた。

“共産主義は悪であり、自由と民主主義の米国は正義の国”  
というのが、米国が国内外に宣伝してきた看板であった。

(「自分の国は世界に対して、正義だけを行ってきた」と誤解している米国民は、最近減ってきているとはいえ、なお、驚くほど多いと思われる。)

2) 1978年、アフガニスタンで親ソ連の社会主義政権が成立したが、無理な政策を実施して、国民の反感を買った。

(国民の多くが小作農民だったが、彼らと地主の関係は良好だったのに、無理な土地改革を進めようとし、またイスラームの社会の基盤である共同体(ウンマ)を破壊する政策を強引に推し進め、社会全体を混乱させた。)

反対する各地の抵抗が勢いを増し、社会主義政権の維持は困難だった。そのためソ連は、政権から要請をうけたとして、大規模な軍を派遣した。

3) ソ連軍の介入に対して、ムジャヒディーンと呼ばれるイスラーム戦士たちが抵抗した。中にはサウジアラビアのオサマ・ビン・ラディンのように、**過激なイスラーム思想のゆえに、祖国から厄介払いされた**(形式的には激励されて送り出された)**者たちが、20万人も含まれていた。アル・カイダは、このときに結成された。**彼らは、イスラームを守るためのジハード(聖戦)を戦った。

## 6. 破綻国家を増やさないために（その3） 私見

(4) 米国が、ソ連とともに作り出した破綻国家の例： アフガニスタン（続き）

- 4) 米国は、ムジャヒディーンに対して大規模な資金援助、武器援助を行い、ソ連に対抗させた。（オサマ・ビン・ラディンは、サウジの最大建設業者一族の御曹司で、対ソ連のためのパキスタンにおける兵站・道路構築等を担った。）

泥沼のような戦いを続けたソ連は、膨大な兵士と国費を失った挙句に、1989年、ついにアフガニスタンから撤退した。ソ連の撤退理由は、1985年に書記長に就任したゴルバチョフが、以前からこの戦いの意義に疑問を持っていた上に、戦死したソ連軍人家族からの悲痛な手紙が、決心させたと言われている。彼の決断の中に、アフガニスタンの人々の苦しみが、どう影響したのかを記すものは、見つけられなかった。

ソ連のアフガニスタン侵攻は、1991年ソ連崩壊の原因となったとされる。

- 5) ソ連軍の侵攻と、米国の軍事援助を受けた者たちによって、引き起こされたアフガニスタンの荒廃は凄まじいものだった。

1980年の人口は、約1300万人程度と考えられるが、この戦争の結果、約200万人が死亡、約600万人が国外難民、約200万人が国内難民となる程の惨状となった。

集落の半数が消滅し、産業基盤も殆ど失われ、埋め込まれた対人地雷によって、その後も被害が後を絶たない。

## 6. 破綻国家を増やさないために（その4） 私見

(4) 米国が、ソ連とともに作り出した破綻国家の例： アフガニスタン(続き)

6) 中東諸国から厄介払いされて、アフガニスタンにイスラームの大義のために応援に来た者たちにとって、ソ連軍に対するジハードの勝利は輝かしい成功体験となった。

7) だが、ソ連軍が撤退した後のアフガニスタンには彼らの居所はなく、やむなく中東諸国に戻ったが、意気揚々として帰国したものの、ジハードの成功により、過激な思想をさらに強固にした彼らは、祖国から冷淡な扱いを受けた。

憤慨した彼らは、以後、イスラーム原理主義の地下活動を各地に広げた。つまり中東諸国は、かつて、急進派を体よくアフガニスタンに追い出して、厄介払いした積りが、思いもよらない苛烈な逆襲を受けることとなった。

8) 米国は、サウジアラビアのビン・ラディンの創ったアル・カイーダによる2001年9月11日の同時多発テロで、殆ど経験のない本土攻撃を受けて狼狽した。

報復として、基本戦略の無いまま、衝動的に(当初、ブッシュ大統領は、“現代の十字軍だ”と宣言して歴史認識の粗雑さを露呈)アフガニスタンに侵攻し、激しい抵抗に会い、今度は米国が抜け出せなくなり、アフガニスタンをさらに荒廃させた。

## 6. 破綻国家を増やさないために（その5） 私見

### (5) アフガニスタン対応をめぐる評価

- 1) 米国における以前の平均的な評価は、おそらく、次のようなものだった。  
“共産主義は悪であり、その代表国家・ソ連を崩壊させることに繋がったのだから、米国の一連のアフガニスタン対応は成功例”

(カーター大統領のブレジンスキー補佐官は、後に、「米国は、ソ連のアフガニスタンへの侵攻前から、社会主義政権に反発する者たちに資金を提供して活動を活発化させた。そのため、ソ連はアフガニスタンに侵攻するしかなかった。つまりソ連は、我々のしかけた罠に嵌ったのだ」と、自慢したという。同じ趣旨の記述は、参考文献16のp90にもある。)

- 2) **ソ連が米国の罠にかかってアフガニスタンに侵攻し、結果として崩壊したということが事実であっても、そのために、アフガニスタン国民全体を惨状に陥らせたことは、とうてい正当化できるものではない。**

- 3) トランプとタリバーンは2020年2月、米軍の撤退を合意。バイデン氏は、以前から、米国の国費と米軍兵士の生命が、アフガニスタンの汚職に消えていくことを嫌悪しており、撤退を早めたが、混乱を防げなかった。

(2019年12月、現地で殺害された中村哲医師は、荒廃したアフガニスタンの農地を蘇らせる努力を続けられていた。)

## 6. 破綻国家を増やさないために（その6） 私見

### （6）米国が行ってきたことの実情の直視

米国は、自らを、“自由と民主主義のを重んじる正義の国”と国内外に宣伝しながら、実際には、下記のように多くの相反する行為をしてきた。

- 1) 1900年の強引なハワイ併合
- 2) 1900年から、フィリピンに対して、独立を阻む戦争をしかけ、ついには植民地化した。フィリピン人20万人～150万人が犠牲に。米国人は、フィリピン人を同等な人間と見なさなかった。  
.....
- 3) 1964年、トンキン湾事件を捏造してヴェトナム戦争に介入し、1975年の撤退まで、ヴェトナム国民と国土を損傷し続けた。
- 4) “米国の裏庭”に位置するニカラグアで、無慈悲な独裁政治を続けてきたソモサー族を40年にわたり支援してきたが、1979年、共産主義勢力の台頭により、失った。

また、世界で最も自由が抑圧され人権も無視されている国である独裁国家サウジアラビアとの親密な関係を、現在も続けている。

つまり、米国は、米国の経済的利益にかなうならば、実際には、多くの国家の独立希望を踏みにじり、どんなに無慈悲な独裁国家でも支援する国という面があることを、直視する必要がある。



## 7. 民主主義国家が誕生するのは、奇跡に近いほど稀なこと

(1) 2011年から発生した“アラブの春”運動は、当初、中東地域に自由と民主主義をもたらすのではないかと、という夢を抱かせたが、失望に終わった。（唯一の成功例といわれたチュニジアも、失敗に近い。）

それどころか、殆どの場合、以前よりひどい混乱に。失敗の理由は、

- ・ 殆どの発展途上国で、大規模かつ根源的な腐敗体質がはびこり、新たに権力者となった者と周囲が、自己の利益確保を優先する。
  - ・ そもそも、民主主義国家が生まれるには、経済発展が背景として存在することが必須であるが、それがあってさえ、民主主義国家の誕生は奇跡に近い。
- (敗戦後、短期間で軍主導国家から民主主義国家に変容した日本は例外的)
- ・ 国外からの介入によって、政権が倒された場合は、国内のどの勢力が勝者なのか、不明のため。(イラク、リビア等)
  - ・ 自由な政治を目指す青年層が中心となって独裁者を倒し、選挙で彼らが選ばれた場合、何でもできると過信し、自分たちの信条に固執し、結果として国民の反発を招いた。(エジプトの場合)

(2) 「私は最も正しい戦争よりも、最も不正な平和を好む」

(紀元前の共和制ローマの政治家キケロの言葉)

(人類は多くの場合、正義より平和を優先してきたのが実情。平和より正義を優先してきたら、人類はとうの昔に消滅していたはず。学校では教えないがこれが真実) ロシアによるウクライナ破壊は、忍耐の外。

## (参考説明3) イラン・コントラ事件 (その1)

(1)「米国の裏庭」と呼ばれる中南米のニカラグアは、40年以上の長きにわたって、米国に支援されたソモサー族が独裁政治を行い、国民から怨嗟の的になっていたが、1979年、社会主義のサンディニスタ民族解放戦線に倒された(ニカラグア革命)。

つまり、1979年に、米国は中東における最大の拠点であったイランを失った同じ年に、中南米における拠点のひとつであったニカラグアも失ったわけである。

両国とも、米国が、“自由と民主主義の守護者”という宣伝文句とは裏腹に、過酷な独裁政権を長く支援した結果、圧政に苦しんだ国民の反乱によって、米国が追い出されたもので、厳しい冷戦下の米国には、大きな衝撃であった。

(2)1985年8月に、米軍兵士らがレバノンで、シーア派系組織のヒズボラの人質となった。

人質を救出する為、米国のレーガン大統領は、ヒズボラの後ろ盾であるイランと非公式に接触し、イランに対し、極秘裏に武器を輸出する事を約束した。

当時のアメリカは、イランと国交を断絶し、イランと戦争していたイラクの味方であり、当然のことながらイランに対する武器輸出は禁じられていた。

## (参考説明3) イラン・コントラ事件 (その2)

(3)レーガン大統領は、極秘裏にイランに対して武器を輸出したばかりか、イランへの武器輸出によって得た収益を、左傾化が進むニカラグアで、反社会主義のゲリラ組織「コントラ」に与え、これによってニカラグアの社会主義政権下の政情を不安定にすることに成功した。

ニカラグアの政情不安は、社会主義政権自体の腐敗問題もあり、今も続いている。

(4)イランへの武器輸出と、ニカラグアのゲリラ組織「コントラ」への資金流用は、破天荒な、米国議会への裏切りであったにもかかわらず、露見した後、本件は、オリバー・ノースという一介の中佐のみの仕業ということで、落ち着いた。

裁判では有罪となったノース中佐は、その後のやりなおし裁判で無罪となった。

(5)2019年5月、トランプ政権下において、ノースは、トランプの強力な支持母体のひとつである全米ライフル協会(NRA)の会長に就任した。

## (参考説明4) 米国の対外拡張主義について (その1)

(1) クルド民族はシリア国内で、米軍の武器援助などをもとに対 I S 戦闘を長い間続け、I S の勢力減少に多大な貢献を行ってきた。

しかし、2019年10月末、米国のトランプは、クルド民族を裏切り、米軍を撤退させて、クルド民族がトルコ軍の攻撃を受けるのを放置した。

(2) このトランプの裏切り行為について、日本のメディアの解説で、「米国は、歴史的に外国へ干渉しないことを国是としてきた経緯があるから・・・」という類の説明をしていたが、全く見当違いだと思われる。

この説明の根拠として引用されたのは、**米国のモンロー主義**と言われるものだが、1823年、第5代米国大統領モンローが教書の中で示したのは、当時、中南米各国に起きていたスペインなどからの独立戦争に対して、ヨーロッパ各国が干渉しようとした事態に対し、「**アメリカ大陸とヨーロッパ大陸間の相互不干渉**」を提唱したもの。

これは実際には、**米国が外国に対して干渉しないことを宣言したのではなく、中南米各国を米国の経済領域に囲い込む意思を表明した**ものにほかならない。

(3) アヘン戦争(1840年)前までは、清が米国の最大の貿易相手国だったが、アヘン戦争で、減少傾向に。ペリーは清との貿易量回復、北太平洋のクジラ漁等のため、日本に開国を迫った。(当時の米の海軍力は、英国に比べ数分の1)

## (参考説明4) 米国の対外拡張主義について (その2)

(4) 1865年までの南北戦争は、約60万人という米国の経験した全ての戦争で、最多の戦死者をだしたが、北軍は、敵兵の殺傷だけではなく、敵地の一般市民の殺傷も躊躇せず、敵の産業基盤・生活基盤を根こそぎ焼き払うという、世界最初の焦土作戦を容赦なく実施したため、南部諸州に根深い恨みを残した。

その後、有り余った戦力の活路は、米国先住民族に対する戦いに求められた。圧倒的な軍事力と、身勝手な法律を背景に、実際は虐殺の連続に過ぎなかったこの戦いは、すぐに終了し、先住民族の殆どが先祖からの豊かな土地を奪われ、荒れ地に追いやられた。

(5) 国内先住民族との戦いが終わると、米国は海外への進出を積極的に企てた。

1898年、米国は米西戦争（スペインとの戦争）をしかけて、フィリピン、キューバ、プエルトリコなどをスペインから奪った。

この戦争は、米国の海外権益の確保に役立ただけではなく、南北戦争によって、深い傷を残した米国内の南北諸州間の敵対感情の融和にも役立ったと言われている。

(フィリピンには独立の約束をしておいて、反古にして植民地化。)

(6) 米国の世界への派遣拡大の本質は、米国海軍少将マハンの著した「海上権力史論」（1890年）に明確に示されている。彼は、この中で、「米国の貿易を擁護し、諸外国に圧力をかけ、米国の国益を守るために、強力な海軍力を世界に展開しなければならない」と、記している。



## (参考説明4) 米国の対外拡張主義について (その3)

(7) 次いで、1900年、米国は、必死の思いで独立維持を目指したハワイ王国を強引に併合し、太平洋の貿易上、最大の重要拠点を手に入れた。

(名曲「アロハ・オエ」の作者としても知られるハワイ王国最後の女王・リリオカラニーの、独立維持への苦闘は胸を打つものがある。

また、その前のハワイ王は、米国からの併合圧力に抵抗するため、明治政府に対して、天皇家との婚姻を提案したが、日本側が、米国に敵対することを避けたため、実現しなかった。)

(8) このように、米国は、歴史上、自国の経済上優位に役立つために、あらゆる手段を講じて諸外国への干渉を行ってきた、という面がある。

日本が戦前に行ったことと基本的に同じであり、戦勝国である米国は、今もそれを続けているのであって、中東への政策も、自国の利益に役立つならば躊躇なく介入したり、撤退したりする、というのが基本である。

「米国が歴史的に、諸外国への干渉を避けてきた」という趣旨の説明は、納得できるものではない。

## (参考説明5) 日本は、難民受け入れ数が、極端に少ない

### 2016年の難民受け入れ人数実績

国名	難民受け入れ数	難民申請に対する認定率
ドイツ	263,622	41%
フランス	24,007	21%
米国	20,437	62%
英国	13,554	33%
カナダ	10,266	67%
イタリア	4,798	5%
<b>日本</b>	<b>28</b>	<b>0.3%</b>

日本は、国連難民関係で、世界第4位の1兆円を拠出するような貴重な貢献をしている。  
しかしながら、日本への難民受け入れ比率は、上表のように極端に低い。

或るクルド人の一家は「日本人は優しい」と考え、日本を避難先として選んだが、来日して初めて、日本が実質的に難民を殆ど受け入れない国と知って、愕然とした。

**彼らの子供は、義務教育は受けたものの、職業に就けず、あてもない日々を送っている。「実情を知っていたら日本に来なかったのに」と後悔している。**

可住面積当たりの人口密度 (人/km <sup>2</sup> )	米国	フランス	ドイツ	イタリア	日本
	51	161	346	297	1109

日本に帰化する人(日本で自活できる能力を示せること等が条件)は、毎年ほぼ10,000人程度で、認定率は概ね90%以上。

## (参考説明5) 日本は、難民受け入れ数が、極端に少ない(続き)

イランは、隣国アフガニスタンからの難民を、これまで、250万人～300万人受け入れている。

\*\*\*\*\*

**(一時期、代々木公園、上野公園などに、大勢のイラン人がいた。)**

1974年、日本はイランとの間に、ビザ不要の相互協定を結んだ。

1988年、イラン・イラク戦争が終結すると、戦線から帰還した多数の若者が戦後の不景気で職にあぶれ、ビザ無しで渡航できる数少ない、経済的に豊かな国として日本が注目され、多くのイラン人が日本にやってきて、短期の職を得た。最盛期には、4万人を超えるイラン人が日本にいて、代々木公園、上野公園が、彼らの溜まり場となった。

しかし、彼らの中からテレホンカードの偽造などの犯罪者が現れるようになり、また、日本の経済情勢が悪化すると、日本は1992年に、イランとのビザ相互免除協定を終了させ、これによって在留イラン人は急激に減少した。

## 8. 参考文献 (敬称略)

1. 有志舎「イラン現代史—従属と抵抗の100年—」(吉村慎太郎 著)
2. 春風社「イランとイスラム」(森茂男 著)
3. 明石書店「イランの歴史」(世界の教科書シリーズ) 1979年のイスラーム革命を肯定的に記述
4. 河出書房新社「(暮らしがわかるアジア読本)イラン」
5. 草思社「イラン人は神の国イランをどう考えているか」(レイラ・アーザム・ザンギャネー 著)  
(注:1979年の革命前のイランを賛美する人たちの図書で、偏った見方)
6. 文藝春秋「戦場から女優へ」(サヘル・ローズ著)
7. 「混乱の続く中東情勢、今後の展望と安定化への課題」 千葉大学法政経学部長・酒井 啓子  
<https://www.hitachi-hri.com/reciprocal/i035.html>  
短い、中東情勢の理解の確実な一助となるインタビュー記事 (日立総研) (2016年3月)
8. 人文地理 第36巻第5号(1984年)p49「カヌート研究の展望」(織田武雄著)
9. NHKブックス「中東 新秩序の形成—『アラブの春』を超えて」(2012年、山内昌之)
10. 山内昌之の10MTVオピニオンでの講義(インターネット)
11. 岩波現代文書34 「9.11以後のイスラーム政治」(小杉泰著)
12. 山川出版「世界各国史・西アジア史 イラン・トルコ編」(永田雄三編)
13. 文藝春秋社「9.11 アメリカに報復する資格はない」(チョムスキー(ユダヤ系米国人)著)
14. 岩波新書「イラクは食べる」(酒井啓子著)
15. 作品社「アメリカ侵略全史」(ウィリアム・ブルム著:元CIA)
16. NHKブックス「アフガン戦争の真実: 米ソ冷戦下の小国の悲劇」(金 成浩 著)
17. 春秋社「福音派とは何か?・・・トランプ大統領と福音派」(鈴木崇巨)
18. ワニブックス「イラン VS トランプ」(2019年9月) (高橋和夫)

## 8. 参考文献(続き)

(参考文献 5 の「訳者あとがき」には、次のように記されている。

「…イランはかつて、トルコに次いで1906年に立憲革命を行い、女性の地位に関しては世界でも先進的な法律をもつ国だった。

それなのに、1979年のイスラーム革命以降、遺産の相続も、法廷での証言の重さも、命の値段までも、女は男の半分という、屈辱的な大昔の法律を復活させるような、奇妙な国になってしまった。

…1951年には石油国有化が実現した。ところが、最初の発掘に寄与して利権を掌中にしていた英国はこれを承認せず、石油の世界への販売をボイコット。困った国王は、アメリカの支援を頼りに1953年にクーデターを起こし、国有化を実現させたモサデッグ政権を転覆させた。

石油販売を肩代わりしてくれたアメリカのおかげで、歳入を確保できるようになった国王は、さっそく農地改革、識字率の向上、婦人参政権など、イランの近代化に着手した。だが、この国では宗教界が膨大な寄進地を所有していて、それをモスクや神学校の維持などの重要な財源にしているため、農地改革がその所有地にまで及びそうになると、宗教関係者から激しい反発が起きた。

国王は軍隊や秘密警察を駆使して反体制派を容赦なく弾圧した。……」

この記述には、米国がイランに対して、よいことだけをなしてきたように記されている。事実は、米国がイランの石油権益確保のために、正当に国民から選ばれたモサデク首相を陰謀で追放し、その結果、専制国王をつくりあげ、その王によって、多数の国民が殺され、拷問されたため、ついに、民衆の意志によって国王が打倒されたのに、そのことを、ひとつも記していない。

貝原益軒は約300年前に、多くの誤り情報の流布を、次のように警告している。

『一人虚を伝うれば、万人伝えて以て実となす』 )